

生田春月編『泰西名詩名訳集』について(4)

——その歴史的意義と問題点——

佐野晴夫

生田春月が上京を果した時期、つまり、明治41年頃、文壇の主流をなしていたのは、封建的道德と対峙する自然主義であった。「早稲田文学」「文章世界」「趣味」などでは、一方で、自我の確立と人間性の解放を旗幟にかかげながらも、他方で、虚構性を否定して、想像力を排除し、事実描写を過度に重視することで、現実挫折の悲惨で悲観的な作品世界へおち入っていた。社会性と科学性をそなえぬわが国の自然主義の偏狭性は、反自然主義の気運を呼びおこした。小林愛雄が編集していた「帝国文学」、泉鏡花たちが拠っていた「新小説」ばかりでなく、新しく森鷗外を中心とする「スバル」は自然主義運動の批判者の側に立って、唯美主義的立場をとった。武者小路実篤たちの「白樺」(明43. 4—大12. 8)もその戦列に加わったけれども、耽美的趣味をしりぞけ、健全な自我と個性の伸長をめざし、倫理的で教養主義的な文芸雑誌であろうとして、長命であった。

「帝国文学」「早稲田文学」「三田文学」が大学の構成員・関係者を中心会員に、その学風を反映させようと意図する創作、評論、研究の雑誌であった。この点、「白樺」は、純粋な同人雑誌であることから、一見したところ、事情が異なる。だが、学習院の同窓生が中核になっている点で、共通性がないわけではない。つまり、武者小路実篤、志賀直哉、木下利玄、正親町公和の回覧雑誌「望野」、2学年下の里見弴、園地公致、児島喜久雄氏らの回覧雑誌「麦」、1学年下の柳宗悦、郡虎彦たちの回覧雑誌「桃園」が合体し、さらに先輩の有島武郎、壬生馬の兄弟たちが参加して生れたものである。とは言え、一高在学中に児玉喜久雄を介して武者小路実篤と親交を結び、1年後に同人となった小泉鉄^{まがね}(明19—昭29)のような人物もいる。

一高時代に、彼は東京帝国大学文科生を中心とする第2次「新思潮」(明43. 9—明44. 3)に参加し、大貫晶川、谷崎潤一郎、和辻哲郎、木村艸太、後藤末雄らと活躍したり、大正中期以降は労働運動にかかわり、雑誌「解放」や「我等」に小説や評論を掲載したり、また大正末からは台湾土族の研究を行ったりした。だが、彼の真価は、明治44年5月の「白樺」で、初めて、「マックス・クリンゲ

ルに就て二つ」を發表して以来、小説、戯曲、詩の創作、感想、評論、そしてニイチェ、ゴルキー、ロマン・ローランの日記、トルストイの言葉、ストリンドベルヒの諸作品を翻訳して来たことにとどまらぬ。東京帝大哲学科を中退した前後に詩を挿画とともに発表したグスタフ・クリムント、そして新進画家エドヴァルド・ムンク、エル・グレコの紹介、またゴッホの評論「ノア・ノア」「絵画は」、ヴェルハアレンの「レムブラント」などの反訳は、文学と美術とを截然と区別しない芸術次元に立脚する白樺派にふさわしく、「白樺」後半の編集者としては最適格の人物であったと言えよう。

このような知識を持つ者ならば、生田春月編「泰西名詩訳集」の中で、詞華集としてはユニークな小泉鉄訳のカンディンスキイ詩を発見しても、さほど意外感を覚えないであろう。小泉鉄が外国雑誌を繙読しているうちに、ロシアに生まれてドイツで活躍する表現主義画家の詩を見付け、その反訳を「白樺」第4巻第9号(大2・9)で「響き」の総題を与えて発表したのである。その中より、生田春月は「讃歌」と「青春」の2篇を選び出している。

讃歌

内部に碧色の大波はゆれる	切りちぎられた赤色の布。
赤色の襤褸。碧色の海。	閉ぢられた古い本。
泡沫は遠くに消えて	森の中の暗黒の混乱。
深く深く碧色の波は成る。	赤色の布は忽ち沈む。

また同誌の同人である柳宗悦も、カンディンスキイと同様に、表現主義の画家で、北独の小さな芸術家村ウォルプスウェーデに1894年(明27)から1918年(大7)まで居住していたハインリヒ・フォゲラアの詩集“Dir”(1899)より訳出している。わが国の竹久夢二のように、自作の詩篇に挿画を描く芸術家フォゲラアに対して、柳宗悦は興味をそそられ、明治44年12月の「白樺」で、彼はフォゲラアの書簡を掲げたあと、フォゲラアの芸術と作品を紹介し、またこの人物に関する著書を挙げている。また「白樺」の主催で、虎の門倶楽部でハインリヒ・フォゲラア展覧会が開催されたとき、かつて生田春月と同じく、雑誌「文章世界」の投書仲間であった菱歌秦豊吉(明25-昭31)は、まだ一高生であった。その彼は、昭和2年1月、雑誌「女性」に載せた「独逸の『新しき村』」の中で回想している。「フオオゲレルの版画の題材は、春と花と、五月、母と子と、恋愛、青春、或は沼の上に飛ぶ鶴、静に流れる帆船、さもなければ『七羽の鴉』とか『蛙王』とかの独逸童話の絵であって、その甘美な情緒と繊細な銅版の技巧とは、少年時代の

私の心に限りない憧憬と悦びを喚び起したものであった。⁶⁵⁾そして、後年、この画家の詩集「お前に」を、若い男女が肩と頭とをもたせかけて、後向きに荒野を眺めている挿画とともに原書で読み、次のごとく、感想を述べている。「これは全篇十三章の愛する女に贈る短詩が集めえあって、纏綿たる哀情と可憐な周囲の風物は、さながらに島崎藤村の若菜集でも読むやうな心持ちがしたのである⁶⁶⁾。」

アネモネの白き褥に
灰色の御影石ひとつ
もろともに昼間しばしば
手を交はしここに坐しけり。
柳宗悦訳

白きアネモネの褥の中に
灰色の花崗石横たわれり
われ癩手に手を取りて
眞昼をここに坐したりけり。
秦豊吉訳

春月は、柳宗悦の平明な訳詩より5聯抜き出している。なお、因みに、秦豊吉は東京帝大法科を卒業し、三菱商事に入社し、ベルリン支店に勤務して4年目、つまり、大正12年の春、かつての思い出からもはや春の情緒を失い、コミュニストとなったフォゲラアのもとへ訪問している。

春月の詞華集が刊行されたとき、小泉鉄にくらべ2歳年下の柳宗悦（明22一昭36）は、すでに千葉県我孫子に移り住み、彼の宗教上の関心は基督教的神秘主義から仏教へ、芸術上の興味は印象主義絵画から朝鮮の美術へ移っていた。彼の宗教哲学への傾斜は、学習院高等科で鈴木大拙や西田幾太郎たちに学んだことに負い、明治43年6月の「白樺」（第1巻第3号）に発表した最初の評論も「近世に於ける基督教神学の特色」で始まっている。また誌上でのブレイクやホイットマンの紹介も、宗教と芸術との融合をめざす尽力から生れたものである。それだけに、彼の文学的活動は、思想に悩み、新しい芸術的打開に苦しむ生田春月の注視をあびた。だから、大正元年9月の「白樺」から生田春月が引用した彼の4篇のホイットマン詩「磔刑せられたる彼に」「畢竟吾は如何なる者なりや」「日没に於ける歌」「喜べよ、船員よ、喜べよ」は、そのような観点より、味読されなければならないだろう。

生田春月が欣然と迎え入れる詩人像は、白鳥省吾や富田碎花など民衆詩派詩人のごとく、自我と平民、個人主義と民主的國家について、大胆な自由詩型でうたうホイットマンではない。むしろ、このアメリカ詩人像の中に、汎神論的立場から、東西の宗教を肯定し、死を超えた人間の永生を説き、死を恐怖としてではなく、喜びとして迎え入れる神秘的合一を提唱する予言的詩人を見たのである。そ

のように生田春月の魂を震撼さす力を、死を通じて生を觀照する有島武郎のホイットマン詩の中でも見出せる。柳宗悦の文語訳に対して、有島武郎の「Pres. Lincoln's Burial Hymn.」「涙」は口語であったが、彼の魂をつかんでほなさぬ。「死の歌」より抜萃された前者の第一聯は、

来い、可憐なつかしい死よ、
地上の限りを隈もなく、落ち着いた足どりで近付く、近付く
昼にも、夜にも、凡ての人に、各の人に、
早かれ遅かれ、華やかな姿の死よ。

で始まり、第3聯では、

静かな足どりで小息もなく近づいて来る暗き母よ、
心からあなたの為に歓迎の歌を歌った人はまだ一人もないといふのか。
それなら私が歌はう——私は凡てに勝ってあなたを光榮としよう。
あなたが必ず来るべきものなら、間違ひなく来て下さいと歌ひ出でよう。

と、死の来訪を僥倖とする魂の準備が完成し、次聯で、諦念をくぐりぬけ、寛容をこえた積極性で、高らかに死の讃歌がうたわれながら、極点に達する。

近づけ、力強い救助者！
それが運命なら——あなたが人々をかき抱いたら、私は喜んでその死者を歌はう、
あなたの愛に満ちて流れ標ふ大海原に溶けこんで、
あなたの法樂の洪水に有頂天になったその死者を歌はう、オオ死よ。

ここに、死界の憧憬者生田春月の共感も最高潮に達する。そして、ここで歌われた死の主題が、後年、有島武雄と生田春月とにおいて、それぞれ反復されるのである。

有島武郎は、大正12年4月下旬から翌月上旬にかけて、秋田雨雀等とともに文化講演に招かれて、米子・大社・松江・鳥取へと山陰旅行をした。最初の米子では、少年期の春月が日々眺めた大山の優美な遠景を愛で、春月が孤独をいやした城山へのぼり、また春月の一家が遠い韓国へ旅立った港の中海に舟を浮べて一日をすごした。そして、帰京後、春月に故郷の景勝の素晴らしさを賞讃したところ、春月も、大正10年から執筆を続け、年内に擱筆したいと考えている長篇小説「相寄る魂」の舞台がこの地であったので、ことのほか、その讃辞をうれしく受けとった。しかし、このとき、有島武郎が最後に訪れた鳥取砂丘において、「浜坂の遠き砂丘の中にして、さびしきわれを見いでつるかも」と、大自然の中であればあ

るほど痛感させられる弱々しく病んだ自我と死へ通ずる孤独が客体化されて歌われたということ、春月は知らなかった。

それだけに、6月9日の軽井沢における有島武郎と波多野秋子との心中事件を知った時の春月の驚愕ぶりは一通りでなかった。最初は、「私の執筆中の小説『相寄る魂』の結末が、私の尊敬していた先輩、有島武郎氏によって実現されようとは、⁽⁶⁷⁾」と、色を失う。春月の小説では、主人公の龍田純一と人妻である西尾敏子とが美保湾で水死を企てるところで終わっている。そこでは、「死は恋愛の極致である。死によって、はじめて愛は完うされ、二つの霊は一に融合する⁽⁶⁸⁾」という情死の思想によって、その仮構の美学は完結する。しかし、春月は、有島武郎と波多野秋子との現実的死の場合、恋愛の極致としての情死としてのみ見ることを拒み、自然法則に服従した二人だけの「重複自殺」とみなす。なるほど恋愛はこれほど直接的で具象的な生の感情であることは疑いがないけれども、反面、恋愛は広い世界を二人だけの世界に収縮させてしまい、人を孤独にする。そのようなとき、孤独と苦悩から救う死の誘惑が生じ、「サイレンの誘い」となると考えられる。そこで、有島武郎が山陰をめぐる歩いていた時期に会った「婦人公論」記者の波多野秋子のことが思い出される。「有島武郎と死を共にした波多野秋子氏は、その一月前に、私の家に来られた。こんな烈しい、強い印象を与へる婦人には、私はまだ会ったことがない。あの有名になった大きな二つの眼。それが語ったものは、強い性格の力であった。波多野秋子自身が、美しいサイレンであったかもしれない⁽⁶⁹⁾。」その彼女も「婦人公論」の「生の悦びを感じる時」という題目で意見を徴された際、ファウストがメフィストに魂をゆだねることになる「まあ待て、おまへは実に美しいから」という言葉を発せざるをえない刹那が来ることを予測し、「『そのまま滅びてもいい』ではないか。それが人生の至高の時なのではないか、そこで生の意義はみたまされるのではないか⁽⁷⁰⁾」と、告白する。この告白は、運命を甘受しながら、「あなたの法樂の洪水に有頂天になったその死者を歌はう、オオ死よ」と呼びかけたホイットマンの境位へ通ずる。また生田春月も、「生の悦びが極まるところが死の悦びである」という認識を、昭和5年19日に、自らの霊肉で贖わねばならなくなる。それはともかく、この心中事件に対して、彼は深く心をうたれ、二人の心情をくみ、理解ある態度をとったが、批判と非難する人が少なくなかった。その一人が内村鑑三であった。

ところで、ホイットマンが、明治25年に73歳で生涯をとじたことから、まだ学生時代の夏目漱石が同年10月の「哲学雑誌」に論文「文壇に於ける平等主義の代表者『ウォルト、ホイットマン Walt Whitman の詩について』」を發表して以来、多

くの文人に愛読され、翻訳されて来た。生田春月のアンソロジーでは、すでに挙げた高山樗牛、柳宗悦、有島武郎のほかに、「草とは何ぞや?」の訳者として畔上賢造の名前が記されている。これは、誤りである。春月も、後日、内村鑑三の作物であると、巻末で訂正しなければならなかった。何故、このような取り違えが生じたのであろうか。それは、この詩が内村鑑三の「詩人ワルト・ホ井ツトマン」の中の「彼の天然観」から抜萃されたもので、しかも初出の「櫟林集」第1集（明42、聖書研究社）からではなく、訂正のうえ再録された内村鑑三・畔上賢造共著「平民詩人」（大3・4、警醒社書店）から引用されたと推定できるからである。と言うのは、巻頭のワルト・ホ井ツトマン論をのぞき、のこりの「アルフレッド・テニソン」「ローエルが早生の歌」「グリーンリフ・ホ井ツチャ」「ウラルズヤスが晩年の詩」「カレン・ブライアント」が、ことごとく畔上賢造の作品であることに起因し、春月が内村鑑三の業績をも、門下の伝導師畔上賢造の訳業へ数え入れる過失を犯したのもやむをえないよう思われるからである。

草とは何ぞや?

小児あり、其手を拡げ我に草一茎を齊して曰く草とは何ぞやと、
我れ如何にして小児に答へんや、我は之に就て彼が知るより以上を知らず。
我は想ふ、之れ我が天性の旗号なるべし、希望の緑の色にしあれば。
或ひは想ふ、之れ神の手巾なるべし、
香水滴らしたる紀念品にして故意と遂に遺されし者なるべし、
其隅に持主の名は記されて我等は其、誰のものなる乎を知るを得べし。
或ひは想ふ、之れ「広き国にも狭き国にも、均しく萌芽し
黒人の中にも亦白人の中にも同じく発生す」てふ意味を通ずる万国共通の象形文学なるべし。
我は更らに思ふ、之れ墓場に生ふる長くして美しく髪なるべし。
心して我は汝を手取るべし、汝、波打たる頭髮よ、
汝或ひは若き人等の胸より生へし者ならん、
我れ若し彼等と識りしならば、多分彼等を受せしならん、
或ひは老いたる人よりなる乎、或ひは母の懷より生れて間もなく生れて間もなく取り去られし赤子よりなる乎、
而して今又此所にありて汝は母の懷たり。

この詩篇において、一茎の草を見た詩人の空想空間が広がる。そこに信仰と愛と情がこめられている。内村鑑三は「平服と平屋と平食⁽⁷¹⁾」の「天真にして気取らざる者⁽⁷²⁾」「能力ある教育なき人⁽⁷³⁾」を敬った。そして「実に単純なる者⁽⁷⁴⁾」を愛した。そのような平民の眼に映る自然をうたう「ホイットマンは平民詩人であった⁽⁷⁵⁾」。その意味では、詩人論集に冠した「平民詩人」は、まことにふさわしい

ものである。だが、詩人論の初めの扉に印刷された原詩の冒頭数行、即ち

A child said *What is grass?* fetching it to me with full hands ;
How could I answer the child? I do not know what it is any more than he.
I guess it must be the flag of my disposition, out of hopeful green stuff woven.

と対照しながら、読みくらべるとき、原文の一語一句がおろそかにされていないとも、内村鑑三の訳稿は、あまりにも生硬な漢文調の翻訳体で、少くとも現代人の耳には、平民詩人にはふさわしく響いてこない。やはり、ホイットマンには、例えば、長沼重隆訳のように、詩の内容を理解させ易い口語体の普遍的言語で、気どらぬリズムで読むのが良い。

「草って何なの」と、両手一ぱい草をもって来た子供が私に尋ねた、
どうして私がこの子供の問いに答えよう……何とてこの子供以上には、それが何かは知らないのだ。

私は思う、それは朗らかな緑色の材料で織られた、私の気質の旌印だろう、と。⁽⁷⁶⁾

だが、かつて訳詩集「愛吟」（明30. 7、警醒社書店）の序文の中で、「詩は直訳さざるのみならず、亦之を意識に附せんとするも甚だ難し、故に之を訳するに唯精神訳の一途あるのみ⁽⁷⁷⁾」と主張している点を考慮するならば、「精神訳」にふさわしいものが、口語で欠落するのであろうか。その答の鍵は、意外に、序文に続く数篇の銘詞の中にあるようだ。そのひとつがホイットマンの「そは大なる思想が/ア>我が兄弟よ、大なる思想が詩人の天職なり⁽⁷⁸⁾」の中で、2度強調されている「大なる思想」に注目するならば、内村鑑三のもとめるものこそ、詩人の「大なる思想」であることがわかる。従って、また求める翻訳のことばと響きは、「大なる思想」にふさわしく格調高く、精神を鼓舞し、信仰心を強固するものでなければならぬ。それに最適なもの何かと言えば、聖書の表現である。そして、言文一致の平明で陳腐な口語よりも、未熟な表現の「詩篇」を思わず生硬な詩行の方が、明治人には、漸新な文体で、ポエジーらしい無韻詩とうけとめられたのであろう。

さて、内村鑑三が、「愛吟」を刊行した明治30年には、すでにホイットマンの全貌ないし輪郭をとらえていたことは、上記のことからも、十分読みとれる。しかも、明治44年の「櫟林集」第1集でのホイットマン論は、夏目漱石や金子筑水のような概念的な紹介に終わっていないうえ、また高山樗牛のそのように、ごく一面的な詩人像の浮き彫りに終わっていない。ホイットマンが正統派の基督教信者でないうえ、まれにしか神と基督の名を使わない「万有神教徒」で、彼ほど靈魂

の不滅と神の愛とについて語る詩人はいない、と内村鑑三は考えているので、この詩人の生命感あふれる詩篇をとりあげるときには、偉大な精神の精華が顕示されたものとみなし、とくに詩人の宗教観、天然観、国家観、人生観に関する考察では、愛の思想で統一している。しかしながら、ここにはホイットマン詩の主要な構成要素である肉体への愛の理解が、彼に脱落しているごとく、ホイットマン以外の詩人を論ずる場合でも、信仰告白やそれにかかわる人生智を表現する詩篇のほかは、さほど興味を示さない。このことは、逆に、いささかでも信仰へ支障を与える読書等に対して、必要以上に敵意をあらわし、彼の門を叩いた若者や彼の後継者となるべき英才をくるしめ、時には離脱を余儀なくした。その例を有島武郎でも、畔上賢造でも見ることができる。

有島武郎は、明治29年、札幌農学校に入学し、母方の知人新渡戸稲造の家に寄宿した。教会派の新渡戸稲造のもとへ、かつての学友である内村鑑三が訪れたこともあり、また「札幌独立教会」という無教会派グループの森本厚吉を通じて親しく内村鑑三の宗教を識るようになった。直観のすぐれた内村鑑三は、札幌農学校の後輩で明治34年に入信した有島武郎がすっかり気に入る、自分の後継者と決めこんだほどである。明治36年から4年間、米国と欧州へ留学し、基督教諸国の実状に幻滅し、それまで親しんできたカーライル、ワアツワアス、バイロンから、読書がエマソン、ホイットマン、イプセン、ゴーリキー、クロポトキンへまで広がった。帰国後、北海道帝国大学農科大学予科教授となったが、彼の関心は、漸次、基督教から社会主義へと傾き、徹底的個人主義へ移って行った。大正元年に、札幌で、彼を内村鑑三は無教会主義の陣営にひきとめようと説得したが、失敗に終わった。有島武郎は棄教したわけでないが、のちに不名誉な死にかたをした彼を背教者として、内村鑑三は辛辣に批判した。

有島武郎と同じく、一方で、カーライル、ワアツワアス、ホイットマンを愛読し、他方で、クロポトキンに傾倒する畔上賢造にとって、生涯、内村鑑三の忠実な助手でありつづけることは、まことに苦難にみちたものであった。霊と肉との一元化による個人の魂の救済と社会主義の実現をめざす無政府思想のはざままで苦悶する畔上賢造に対して、内村鑑三は、クロポトキンの崇拜者であるという点で、ある時期では、裏切りとみなし、基督教徒の資格がないと不快感を露骨にあらわしたことがある。気性が烈しいうえに、単純明快な態度を示す内村鑑三のもとで、誠実な門弟は、幾度となく、背信者の仲間入りする危機に襲われている。そうでもないまでも、師は押しつけがましく、例えば、明治44年5月4日、千葉県千葉町東金に住み、旧制千葉中学校の英語教師をしていた畔上賢造に宛てた書簡の中で、

宗教家でない宗教人で、ニュー・ヨークの弁護士フィリップ・マウローの小著の翻訳を依頼したあとで、「種々と御話し致したきこと有之、且つ宗教上のことに就ても御注意致したき事も有之候由、日曜日を利用して御来訪相成りたく候。食事は当方にて差上候。汽車賃は社にて御手伝すべく候（失礼ながら）⁽⁷⁹⁾」と書いている。この個所から、うかがえるごとく、「聖書之研究」に寄稿しはじめた時期より、師の積極的で厳しい指導が、信仰およびそれに付随した文学研究にまでおよぶようになる。それが顕著になったのは、明治42年10月、11月に連載された「聖書之研究」（第113号、第114号）の「詩人ホイッチャー」の論稿を執筆した前後と推定される。「君に由て、小生の此特愛詩人が斯くも完全に『研究誌』の読者に紹介されしことを、小生は君の論文を編輯又校正しつつ（前後三度精読せり）、小生に於ける永年の伝導事業の、之にて存分に償はれしことを感じ申候⁽⁸⁰⁾」と、書簡を受領する者の情へ訴え、感激へ導く賛辞も忘れていない。

長野県上田町（現在上田市）の質店の長男に生まれた畔上賢造（明17-昭13）は、15歳の旧制上田中学校の生徒のとき、長野・新潟・千葉・岩手・福島を中心に「田舎伝導」をしている39歳の内村鑑三の講演に感銘を覚えた。明治35年に、彼は早稲田大学に入学し、哲学を学んだ。そして角筈聖書研究会のメンバーとなり、午前中で内村鑑三の講演が終ると、午後は、会員有志で借りた中野の農家の離れに移り、討論や祈祷の集会をもった。父親の死後、のこされた借財と老母と弟の扶養に苦勞しながら、明治40年に大学を卒業すると、千葉中学校へ赴任した。生計と学資のために、彼はすでに内外出版協会の偉人研究シリーズで、中山介石のトルストイ、ガーフキールド、フランクリンの言行録と並んで、彼は「リンコン言行録」「グラッドストーン言行録」（明40. 8）を編み、サミュエル・スマイル「自助論」（明40. 1）、バンクス「理想の紳士」、さらにヘンリィ・ドライモント「人間上進論」を翻訳しているうちに、内村鑑三の執拗な容喙が始まったのである。そして遂にはカーライル著「クロムエル伝」全3巻（大2. 2-大3. 5、警醒社書店）の序文で「日本におけるカーライルの弟子たる恩師内村鑑三先生が本訳書の成るについて与へ給ひし指導と奨励⁽⁸¹⁾」について言及するに至る。

畔上賢造が内村鑑三を初めて識った頃、同郷人で、東京の天主教会のミッション・スクール仏英和女学校へ通学していた成沢むつは、無教会主義に反感を懐き、内村鑑三に議論を挑んだ。それが転機となって、逆に内村鑑三の宗教観に魅了され、信者となった。むつも父親を亡し、畔上賢造と悲しみを共有することから、愛が芽ばえ、明治42年春に結婚した。しかし、明治44年、皇太子の千葉中学校行啓の折に明らかとなった学校関係者の偽善に耐えられなくなり、内村鑑三と同じ道

を歩み、無教会の基督教伝導をする決意を披歴した。これに対して、明治24年に第一高等中学校で不敬事件をひき起したことのある内村鑑三は、明治44年9月15日付けの書簡で、「教育界御脱出の理由は、小生にも善く解り申候。君にして確信あれば、小生は君の今回の御決心に満腔の賛成を表し候」と伝えるとともに、ここで初めて、内村鑑三主筆の伝導雑誌「聖書之研究」の原稿を毎月少しずつ執筆し、また編集を手伝うようにと指示した。そこで畔上賢造は、大正8年に東京市戸越へ移るまで、千葉県東金町や鳴浜村を中心に農村伝導に励むかたわら、内村鑑三の助手として、師の過去10年間のエッセイに加筆しながら、一書へまとめる「所感十年」（大2.12）の編集にあたった。そればかりでなく、毎月1週間は上京して、柏木で「聖書之研究」の校正、印刷所との交渉、発送の宛名書き等に費し、疲労困憊のすえ、退京する生活をおくることになった。

ところで、雑誌「聖書之研究」は、内村鑑三の愛国心を秘めた国民主義的で、反世俗の独立精神を表明しながら、教会や外国人宣教師に頼ることなく、日本人に基督の福音を説く個人的伝道機関誌であった。明治33年7月に「東京独立雑誌」を廃刊することになったのを契機に、彼がまだ札幌農学校生徒であった明治10年に入信して以来、東京で官吏をしていた時代にも、全国各地で教師をしていた時代でも、「万朝報」のジャーナリスト時代でも、忘れることなく、夢みながら、実行へ移せなかった伝道事業を、40歳になって、やっと踏み切ったが、そのきっかけを与えたのが、この月刊誌であった。自らの信仰心をかたに、賛同者約3千名の購読料と有志の寄附金によって、彼が昭和5年に永眠するまで、357号発刊した。いまや、これで既存の教会組織に属さず、洗礼も聖餐の知識さえもたず、ひたすら聖書と「聖書之研究」を読むことによって、基督を信じ、基督教に生きる無教会信者が多数うまれることになった。それだけに、畔上賢造が助手になることによって、従来、彼自ら全誌の大半の原稿を執筆するばかりでなく、編輯と発送に従事しなければならなかった労苦を軽減でき、また大正2年には柏木の今井館附属の聖書講堂を新築し、それまでの地方伝道から都市型の会堂伝道へ形態をかえて行った。他方、そのうち、畔上賢造は、内村鑑三が基督者であるべき贖罪からはなれ、再臨運動に熱中するあまり、教会派とも携携するあり方に批判的にならざるをえなくなったり、また無教会主義の中心教義と呼ぶべき「羅馬書の研究」（大13.9）は、内村鑑三の講演内容に学究的な畔上賢三が自由に加筆してできあがったものであるだけに、刊行時に共著とされるべき筈であったが、内村鑑三は自分だけの名前で刊行することに決め、畔上賢三の失望は大きく、煩悶せざるをえなくなった。それでも20年間「聖書之研究」発行に尽力した。だが、昭

和4年秋に、大正12年11月から助手になっていた元高級官吏で語学の得意な塚本虎二とともに、畔上賢三は内村鑑三のもとを去らざるをえなくなった。そのとき、内村鑑三は「同志の弁護」と題して、「畔上はこのたび内村聖書研究会より独立して別に彼自身の研究会を持つに至った。これは彼のために計り最も善きことであって、自分が特に彼を勧めてこの拳に出でしめたのである。彼は今や一家を成すの十分の力量を有す。彼はいつまでも他人の補助者として存すべきでない……別れたのは日曜日の高壇だけである。『聖書之研究』は依然として彼との共働事業である⁽⁸²⁾」と、ねぎらっている。畔上賢造は、毎日曜日、自宅で家庭集会を始め、昭和6年からは丸ビルで集会を開き、中央聖書研究会と称した。昭和5年、内村鑑三の逝去に際しては、葬儀委員長の大役を果し、故人の意志を尊重して、「聖書之研究」を4月号で終刊とした。そして彼は新しく「日本聖書雑誌」を創刊した。だが、彼は昭和11年夏に眼底出血のため、殆んど視力を失い、さらに翌年高血圧と腎臓病を病んだ。昭和6年の満州事変を契機に大規模な侵略戦争への動きがますます顕著になる中で、塚本虎二や黒崎幸吉は協力姿勢をとったけれども、彼は信者の団結で戦争防止の道を説いた。だが、昭和13年6月病死した。

今日、翻訳家としての畔上賢造の名は忘却されたかの観があるが、57篇の原詩に訳詩と解説を加えた彼の「ウラルツラス詩集」(大4. 2, 聖書研究社)は、日本の翻訳史上で特異な位置を占めるものである。初出の訳稿と、それを推敲した訳詩を並記して見てみよう。

激流の畔^(ほとり)に立ちて
 激流激をうち且躍り且吼ゆ、
 見よ、人の心に似たり、
 百想湧けど動きて定まらず、
 恰も此渦流の泡のごとく、
 互に逐ひつ逐はれつ
 めぐり又めぐれど
 出口なく安止所なし。
 一旅人よ、汝かゝる不安を抱かば
 跪きて大能の助けを求めよ。

「聖書之研究」より

激湍の岸に立ちて
 見よ此激湍の人心に似たるを。
 百想湧けど動きて定まらず
 さながら此渦流の泡の如く、
 互に逐ひつ逐はれつ廻れども
 出口を見出すことも叶はず、
 安み止る所をも得ず！
 旅人よ、かゝる不安汝は在らば
 跪きて天の助けをもとめよ。
 「ウラルツラス詩集」より

この訳業を見れば、春月が簡潔に評した「気力ある訳しぶり⁽⁸³⁾」という言葉がいかに適確であるかわかる。その気力とは、伝道者のそれに通ずる。大正4年3月の「聖書之研究」(第176号)の巻末に載った内村鑑三の筆による広告文中の「訳者はウラルツラスが詩集の殆んど全部を読みて其中より最も信仰的、精神的なる

ものを選抜したるなれば、此一巻に詩聖が最も佳き思想と最も高き靈感とを集め得たりと信ず。高き思念と強き慰藉とを供する書として我生活の伴侶とすべく、又人に贈りて『低き生活と高き思想』とを實現せしめ得るべし⁽⁸⁴⁾」の個所を参照するならば、気力は「最も佳き思想」を「最も信仰的」に伝えんとするところより生れたものかもしれない。だが、春月のアンソロジーの選択基準は、むしろ「高き思念と強き慰藉とを」兼備し、「精神的なるもの」を「最も高き靈感」において提示したものにあった。

上記の「激湍の畔に立ちて」は、「聖書之研究」第149号の「落日の光輝——トルゾラス晩年の詩」の中に挿入されたもので、それがそのまま「平民詩人」に再録されているけれども、春月は英国の湖畔詩人の他の2篇「孤独の麥刈女」と5章からなる「刻名」の「其三」と同様に、数年後、改訳して、編んだ訳詩から採っている。これに対して、彼の訳出したテニソン「砂洲を過る」は「平民詩人」から引用したもので、その初出稿は明治45年1月の「聖書之研究」（第138号）の論文「テニソンの宗教詩」の終りで、「砂洲は河口にある砂洲を意味し、砂洲を過るといふは死を通過して来世の大海に乗り出づるを云ふ⁽⁸⁵⁾」の注解を添えて、発表されたものである。このように彼の訳詩を4篇も採録したということは、思想性においては内村鑑三に及ばぬものの、詩情と詩思の表現においては、師に勝り、端正な用語と声調の高さを重んじている畔上賢造の訳詩を春月が愛好した証左である。

ところで、「聖書之研究」は読者へ直送される月ぎめ雑誌であるため、書店の店頭には並ばなかった。だが春月は生田長江のもとに寄宿している明治41年12月26日に、東京帝大前の古本屋で、この雑誌を「文章世界」「神仙譚」とともに10銭で購入し、読んでいる。そして恐らく、長江自らの口から、明治32年に聖公会付属のミッション・スクール大阪桃山学院より東京のメソヂスト派の青山学院中等部第5学年へ転校した直後、ユニヴァーサリストの信者でありながらも、内村鑑三の「東京独立雑誌」に特別な魅力を覚え、また講演会に出席して「……クリスティアンなると否とを問はず、総じて日本人の、白く塗り立てた墓の如き偽善と矯飾とを、むごたらしきまでに暴露し、剔抉し、熱罵し、冷笑して行く内村先生の悲莊なる悪戦苦闘に、實際武者振いがつくほどの共鳴を経験した⁽⁸⁶⁾」ことを聞いたであろう。またこの時期の彼の日記を読むと、まだ基督教徒であった長江の指導と感化で、彼は毎日数頁ずつ聖書を読み、讚美歌を誦詠しながら、感きわまって涙を流したりしている。その思い出の記念が「泰西名詩名訳集」に収録された猶太篇としての「旧約聖書」の引用の個所である。ダビデの作として「撒母耳後書」

第1章の19節から27節にかけての「弓の歌」、および「詩篇」第133篇「京もうでの歌」である。次に、ソロモンの作であると断定しがたいながらも、ダビデ王の子を素材としていることから、ソロモンの名前のもとに整理して、「雅歌」第2章8節から17節まで、ついで「伝道者の言」として、「伝道者之書」第1章2節から9節まで、同18節、第2章1節、第7章14節、第11章9節の抜萃である。第3にエレミヤの名称を冠し、春月の最も愛誦した「耶利米亜哀歌」第1章1節から3節までが引用されている。そしていずれも詩行のごとく分けられている。またこの明治42年から大正2年にかけて、彼は聖書的世界を詩材にとりあげている。第1詩集「靈魂の秋」中の「罪人の詩」「不幸なる人の子のため」「あはれなる基督の弟子の歌」「不信者の聖歌」「罪人の群れより」「聖母マリア」、また「感傷の春」中の「東京市に神はあまさん」等は春月らしい佳篇で、パロディ的味わいのものから、人間的原罪に似た宿命を悲嘆するもの、罪過を贖うもの、さらには背徳的に負の精神世界を志向するものまで、現代人の繊細で不安定な心理が映し出されている。

さらに「泰西名詩名訳集」を吟味するとき、もうひとりの基督教伝道者がいることに気付く。それはダンテの翻訳家中山昌樹（明19-昭19）である。明治43年に明治学院神学部を賀川豊彦とともに卒業し、大正8年まで、奉天・京都吉田・東京下谷で伝道生活を送り、その後、母校で教育に携わった人物である。

ダンテは、明治10年代より英語本で読まれはじめ、明治20年代になると、明治学院で島崎藤村、馬場孤蝶達は英訳で「神曲」を読んでいる。彼等とともに「文学界」同人であった上田敏と平田禿木は熱心なダンテ研究家となっている。上田敏は、急逝したため、翻訳は完成しなかったが、彼の三周忌に「ダンテ神曲・上田敏未定稿」（大7.7）が星野敬一の手で刊行された。また大正3年11月に山川丙三郎が「神曲・地獄」を警醒社より公刊しているけれども「淨火篇」は大正6年5月、「天国篇」は大正11年となる。最も早く原典によって3篇「地獄篇」「煉獄篇」「天国篇」（大6.2、洛陽堂）を完成したのが中山昌樹であった。彼はすでに大正4年に「文芸復興の三大芸術家」を論じているが、春月は「大正6年2月に上梓した『新生』39よりソネット『小曲』を抜き出している。彼は「大正13年から翌年にかけて、独力で『ダンテ全集』全12巻を完成しているが、その第4巻（大14.1、新生堂）では詩稿を改めている。『新生』を英語で読む者の多くは、正確さから言うと、いくぶん劣るけれども、特別美しさをもつロゼッティ訳を使用した。このほかに韻をふむものどふまぬものが混在しているノートン訳や、同様に逐語訳に徹しているけれども、訂正箇所を含むトーマス・オキーンが手がけたも

のがある。このテンプル・クラシックス・ダンテのオキーン本では左頁の伊太利語原文と対照に英訳されている。中山昌樹が大正6年に「新生」を出版したときには、オックスフォード・ダンテ第3版の伊太利語テキストを使用したのが、大正14年の版では、1921年に伊太利ダンテ協会出版の「ダンテ全集」の批判テキストで改訳を試みた。

これに対して、春月の師匠生田長江が世界文学全集のために「神曲」全篇（昭4.8, 新潮社）を翻訳したときは、「地獄篇」から「煉獄篇」の初めにかけて、主としてロングフェロー訳を底本に使い、そのあと「天国篇」まで、上述のノートン訳をとり、あわせて15種類前後にのぼる英独の重訳を参照している。春月ゆかりの人物と言え、竹友藻風も「神曲」（創元社）を昭和23年より2年の歳月をかけて完訳するが、それ以前に、「あるの」第1号（大9）で「地獄界」を発表している。

日本におけるダンテ受容史の中で、内村鑑三をはじめ、藤井武、塚本虎二、矢内原忠雄たち無教会派の人々は、ダンテを宗教改革の先駆者に位置づけている。ところで、同志社大学神学部で学んだあと、京都帝大英文科の選科生となった藻風竹友虎雄（明24—昭29）がダンテ研究を始めるようになったのは、基督教的理想主義の関心からというよりも、恐らく英国浪漫派詩人および恩師上田敏の影響が大きかったせいであろう。

文学少年として、春月は「ハガキ文学」「文庫」「中学世界」等へも投書していたが、竹友藻風の文学活動の中心も「文章世界」であった。明治40年に、田山花袋が主筆であるこの雑誌の12月号の「読者通信」欄に、「大阪の諸君はお遊に入らしやい。文芸に関するお話を交換しませう、その折は鳥渡ハガキで御通信を。

（大阪市中の島4の78（筑前橋北詰西入）船橋方生田春月）⁽⁸⁷⁾」の活字を発見し、早速、交流を始めた。春月は韓国密陽から祖母の住む山陰道淀江宿へ帰国する予定を変更して、明治40年10月25日に大阪にやって来て、翌年6月30日まで滞在し、この間、ひとりでひたすら文学の研究と創作に専念している。春月は富島町の川口波止場に上陸すると、田養橋市電停留所そばの「朝日屋」（大阪市北区中ノ島4ノ36）に投宿した。1日半の宿泊料も払いかねる状態で、旅館の番頭のお世話により、移った先が下宿屋「船橋」であった。しかし、月額9円50銭の下宿料も負担となり、丁度「文章世界」に交際希望の記事が載った年末に、西洋菓子店「開花堂」（大阪市北区上福島2の637吉岡みね方）の2階の2畳に移り、自炊生活をはじめた。12月の日記は未発見であるが、「鳥兎匆匆」（明41. 1. 1—6. 29）と名付けられた新年の日記で、竹友藻風関係の記事をひろい集めてみよう。

「明治41年1月9日（木）晴 午前藻風君が訪問せられた。不変、元気がいゝ。学校は昨日からはじまったが、しらずと今日もやすむ。土曜の夜に來いと云ふ。趣味12月号をもってゆかれる。」

「1月11日（土）雨、のち晴れ。晩、玉川町の竹友君を訪門しようとする。家が見つからず帰る。」

「1月19日（日）夜、藻風君來た。『蒲団』ののった小説をもってきてくれる。明日来てくれと云って帰る。」

「1月27日（月）曇天、寒し……午後竹友君がきた——例の小説『あの女』の原稿を見る、手帳に2・3頁かいてあるが、筆馳れぬ人が新奇な筆つかいをやると見えて不得要領が、不自然におちいるものだ。」

1月9日の「不変」という表現から、その春月訪問が数度目であることがわかる。そして一連の記述から、1月11日を境として敬語法が緩和され、最後の叙述では、それどころか、批判的表現をこえて、見下す態度が映し出されている。さらに、翌日の日記には記載されていないけれども、竹友藻風から絶交状が届いていると思われる。というのは、竹友藻風との交際の次末記を短篇小説「秋本と竹友」にまとめ、春月は一ヵ月後の「文庫」に掲載しているからである。

小説中で、春月は自らを秋本という主人公に仮託し、攻撃相手には実名で登場させ、予断をもって書いている。「障子をあけてづかづか入って來たのは竹友と云って矢張り17、8の青年だ。秋本とはつい昨今のつきあいであるが、表面は可なり親密にして居る。⁽⁸⁸⁾」2人の間柄は、互にうちとけぬ敬語による上つつらの友誼で、内心はいやな奴が來たと思っている。そして何事にも自信をもち、自慢しがちな竹友から自然主義的象徴詩と称するものを手渡されたとき、反発を覚える秋本はそれに模倣の気配を感知する。

蟹の歌

わが恋はわだつ藻の花、潮に生ふ性をえてけれ、
ひねもす 終日は君を恋みて、あをあをと洋のくらやみ、
眠れぬと眼をし閉じれば、あな悲し蟹の歌きく。

蟹の歌誰かはしらむ、海の底珊瑚のかけに、
寂莫の死の節ながく、幾夜より歌ひそめけむ、
波荒れて人死ぬ宵は、その歌はいや冴えまざる。

わが恋はわだつ藻の花、潮に生ふ性をしえれば、
流れ行く流離の夢と、ふとぞしもその声きゝぬ、

冴えわたる歌の節々、胸の琴はじくゆれつる。

かゝる時大海原の、波なりて風はよどみつ、
物棲き死の声呼び、^{みまこ}「人」の影洋底にうかぶ、
蟹の歌いよゝ冴えつる、誰が子ぞいまし沈める—

わが恋はわだつ藻の花、そと抱きあゝそと夢む、
君が影こゝにありけり、もの云はず我は黙して、
君を泣く波の上かな、蟹の歌今は聞えず。⁽⁸⁹⁾

また少年らしい単純で非現実的なモチーフと稚拙なプロットで、しかも筆慣れぬ表現からなる小説「あの女」の草稿を読まされたとき、表面上はほめおだてながら、腹の中では、冷やかに突撓ねる。しかし、それも束の間で、竹友が冷かし半分に秋本の貧乏生活を嘲笑した瞬間、秋本の矜持は傷つけられ、相手が基督教徒であることから、最高の強烈な皮肉をきかせて、「宗教に囚へられた芸術はよからう、宗教を信じて覚束ない安心をしてゐる人は幸福だ。⁽⁹⁰⁾」と言葉を投げつける。このことによって、翌日、竹友から絶交状がとどく。

春月の小説が発表されると、早速、次号でA生なる人物が批評している。「上ツ調子なのが甚しくキツである。読者は読み了ってから何となくポカンとした感がある。秋本という感心な男は、時に詰らぬ理屈を云はせられている。僕は竹友といふ男が好きだ。罪がなくて面白い。作者は秋本を持ち上げて、竹友を馬鹿にしてゐる。それから此の作には意味がない。⁽⁹¹⁾」と、すこぶる手厳しい批判を加えている。確かに作品はあまりにも主観的であり、客観的で多角的な視座に欠け、状況描写も人物像の掘り下げも不足している。作者の経験的事実に拠りすぎ、自己弁明に終っている。しかし、「此の作には意味がない」とまで言わせた作品を春月に執筆させた根源的力は何であるか。それは彼の自尊心であろう。良家の坊ちゃん、何の不自由もなく中学校へ通い、好きな文学書を思いのまま購読できる竹友藻風にくらべ、希望する中学校へ経済的理由で通えず、1ヵ月十数円の支送りをえながら、極貧と孤独に耐えて、ひたすら文学の研究と創作に励む春月の心中に、たとえ文学的才能が勝っているという自負があるとしても、いささか僻がひそんでいることは否定できない。しかしながら、厳冬の夜、火鉢だけで暖をとり、炭を俵ごと購入できないので、階下の老婆に数本ずつゆずりうけ、ランプ用の石油を数錢ずつ買いに行く春月に対して、来訪した竹友藻風が、「暗くて閉口するよ、貧乏程情けないものはない、障子あければ風はいる、さうかと開けねば真ッ暗闇か、ハツハゝゝ⁽⁹²⁾」と、嘲笑しなければ、春月も相手に最大の恥辱を

与えなかったであろう。とは言え、春月の経済的背景や心理的屈折の知識を与えられていない小説の読者には、秋本の感情のみが「上ッ調子」に吐露されたにすぎず、主題が何なのかも理解されなかったのである。

春月は、僻からくる自らの軽卒な言行を悔いる日がやって来た。元号が明治から大正へかわると、上田敏の推薦で「三田文学」「スバル」「心の花」等に毎月のように竹友藻風の作品が掲載され、その名前を目にするたびに、春月の良心は痛み、大正2年には、ひそかに7聯からなる詩「罪人の群れより」を創り、筐底におさめ、のちに「靈魂の秋」に収めている。それは、自らを哀れなフリジアの牧人に、竹友藻風を美しきアポロンの堅琴の詩人に比した賦詠である。

されどかのうらはしきやさしき子は生ひ立ちぬ、
しかして立琴をかなづるいみじき詩人とはなりぬ。
人を厭ふ心にたえず追はれて、
我は死の蔭の谷にも似たる沼辺にすわり
草笛につきぬ嘆きをこめてぞ吹く。⁽⁹³⁾

この第6聯につづく第7聯で、「清き若者、^{おとめ}少女の口は君が聖き歌もて充たされる」の1行に出会うとき、この詩作が大正2年7月に上刊された竹友藻風の第1詩集「祈祷」（靱山書店）の直後であると推定できる。なぜならば、その詩集の序文を飾る上田敏の評言「慎ましくしをらしい清教徒の少女を憶起させるニウ・イングランドの後園のやうだ」を、明らかに春月が読んだあとの詩行と考えられるからである。この詩集で、あらためて、藻風が、春月のように、反抗と否定の詩人でなければ、世紀の呻吟をもらす種類の詩人でないことを識るのである。藻風は、懐疑を楽しむ態度を愚かなものとしりぞけ、嘆くことはあっても、信仰に生き、生を肯定することに幸福を見出すから、「ここには凡てが調和的で、静穏で、且つ清朗である⁽⁹⁴⁾」。ようやく、この時点で、春月は、竹友藻風の詩の静かな調べを愛することが出来るようになった。だが、春月は、自らが「恋、狂、酔」のディオニズ的詩人であることを自覚する。2人の詩人が再会し、昔日の友誼を回復し、さらに竹友藻風が春月を、貧窮と流浪の体験をもつギッシングになぞらえる日がやって来る。それは、4年間の米国滞在から帰国した大正9年に出席した詩話会後の酒席においてである。ところで、春月は、まだ和解の実現しない大正3年3月に、雑誌「詩歌」に発表された竹友藻風訳のアアサア・シモンズの「アランの嶋辺にて」を詞華集へ収録している。

逝く年のうすらあかりに 夕影の路たどれば

ほのぼのと翹うちかはし	白き蛾の夜は飛びかふ。
われも日のほのに白みて	あはれなる暮とならまし。
ほの白きまどろむ海は	いつしかにわれを包みて
平安 <small>やすらひ</small> を残すとすらむ。	わが心ながき嗟嘆 <small>なげき</small> を
かなしくもあやし静むる	わたつみの低きにためいき。

また春月編の詞華集で看過してならぬのは、上田敏の愛弟子で、竹友藻風と競った詩人青煙出野彰夫のノヴァリス「夜に捧ぐる歌」である。これは大正元年10月の「心の花」に掲げられたものである。この時期の「スバル」「詩歌」「芸文」を手にすると、ペイタアやラングの訳詩のほか、彼の非凡な創作詩にぶつかる。

さて、春月とほぼ同年輩の学匠詩人として竹友藻風や出野青煙の名前を挙げるならば、彼等が京都帝大で学んだのに対して、東京帝大出身者では山宮允（明25—昭42）がいる。彼は大正元年に入学した大学では英文学を専攻するとともに、まず三木露風たちの未来社に参加し、また第3次「新思潮」の同人になり、詩作や評論ばかりでなく、イエイツやブレイク等の訳詩を発表し、「アララギ」でも活躍した。大学を卒業した翌年、文部省の囑託となっていた彼は、わが国で最初のもまとまったイエイツ論「善悪の観念」（大5、東雲堂）を発表した。春月はこの書について、「その神秘主義的思想を稀世の名文を以て述べたる名著である⁽⁹⁵⁾」と評価した。また大正6年に「現代英詩鈔」（大6.2、有朋館）が公刊されると、さまざま、春月は感動をもって読み、この一書からアアサア・シモンズ「ヴェニス」、イエイツ「酒の歌」「恋人はその友に旧友を説く」「恋人のなげき」、エエ・イイ「苦痛」「え知らぬ神」、クレエヴス「流星」「薔薇と芸香」の8篇を採用した。これらの詩篇は、「苦痛」をのぞき、のちの訳詩集「紅雀」（大14.4、内外出版）に再録されているが、部分的に改訳されている。6年11月に、大正詩壇で大きい位置を占める詩話会が設立されると、彼等も参加した。そして春月編の「泰西名詞名訳集」が上梓された翌月、山宮允は六高教授となって、東京を離れた。

最初、会員数が約40名で組織された詩話会は、大正10年3月、「現代詩人選集」などの人選をめぐる対立が生じた。北原白秋、三木露風、日夏耿之介たちとともに、春月編の名訳集の訳者である茅野蕭々、堀口大学、西条八十、竹友藻風、山宮允、柳沢健は脱退して新詩会を結成した。

柳沢健（明22—昭28）は、大正4年に東京帝大の仏法科を卒業すると、一度は通信者の官吏になったが、新聞記者を経て、外交官になった。彼は一高時代より詩作に励み、島崎藤村や三木露風に師事した。大学在学中、詩集「果樹園」（大3.12、東雲堂）を発表するとともに、「未来」同人となり、卒業後は、西条八十、

山宮允、日夏耿之介たちと「詩人」を発行し、白露対立時代には、白秋攻撃の先兵となった。大正7年には北村初雄、熊田精華と共同詩集「海港」を出版したことは、すでに述べたことである。彼はこの顔ぶれに前田春声たちを加えて雑誌「詩王」を創刊した。

柳沢健の詩風には、感傷主義と神秘主義がうかがえる。それだけに、春月の「靈魂の秋」が著わされたとき、孤独と悲哀の詩人の稟性を理解と示すと同時に、時代的要請として、韻律論の攻究や象徴主義の手法が欠如していることを鋭く指摘し、「著者の制作には『感情はあるが、感覚はない』こと⁽⁹⁶⁾」の反省をせまった。その点、柳沢健の詩には象徴主義の精神にかなった都会的感覚とエキゾチックな情感をそなえている。また上田敏の影響のあとをうかがわせる訳詩を「果樹園」「海港」に添えているが、注目すべきものにアンリ・ド・レニエ詩集、ポール・フォール詩集、アルベール・サマン詩集の3部からなる「現代仏蘭西詩集」（大10.2、新潮社）がある。春月は、彼の訳詩として、「現代仏蘭西詩」の冒頭で「逝きし日々に向ひて」と改題される以前のレニエエ「過ぎゆきし時に向ひて」を詞華集へ採用している。

ところで、分裂した詩話会に、百田宗治、白鳥省吾、福田正夫、富田碎花、千家元磨、佐藤惣之助、正富汪洋、萩原朔太郎、室田犀星、山村暮鳥たちのほか、春月の詞華集の訳者としては福士幸次郎、高村光太郎、川路柳虹がのこった。26名の詩人の選挙により春月をふくむ10名が役員に選出された。そして春月の斡旋で新潮社から機関雑誌「日本詩人」および年刊詩集「日本詩集」を発行することになり、はじめ白鳥省吾と百田宗治が編集にあたり、1年半後は福士幸次郎にかわった。

春月は詞華集へ黄雨福士幸次郎（明22-昭21）の翻訳したデエメル「収獲の歌」とストリンドベルヒ「冬中の盛夏」を取り上げた。英語本による重訳であるが、それは青森県立三中を中退して、東京の開成中学へ編入学し、さらに国民英学会で学んだ語学力が基礎となっている。秋田雨雀を介して佐藤紅緑のもとに寄寓したり、自由詩社の「自然と印象」第1集（明42.5）に刺激をうけたことから詩作をはじめた。「スバル」「創作」「新文芸」「劇と詩」に詩を発表したり、千家元磨たちと「テラコッタ」や「生活」を発行したりした。自己喪失の危機から脱した記念である処女詩集「太陽の子」（大3.4、洛陽社）で詩人の地歩を築いた。春月が彼と知り合ったのは大正4年頃と思われる。後年、花世は夫の春月をそのガラス器のような神経質な感性から「月の詩人」または「哀れな月の子」と呼び、「『太陽の子』の詩人はいつもよく『哀れなる月の子』の詩人を慰めはげますべく、

曉や、又深夜にもおとづれて来ては、高く笑ひ、朗かに談じた」友情の有難さを感謝するとともに、「春月は女性的で、忍びやかで、そして木かげの夕風のような詩境であった（後年には太陽と死を凝視し黒赤色の蜘蛛のやうに変化した）、福士の詩境は太陽に向う朴の木のようなものだった⁽⁹⁷⁾」と対比しながら回想している。昭和5年5月24日、春月の不慮の死を悼み、福士幸次郎は回わされ来た「澹雲春月帳」に、「君の死を負ひて/吾等は行くべし」と書き入れた。

その2ヵ月後に、春月の薫陶をうけた若き詩人達は麻上恒太郎、大島庸夫、松尾啓吉、杉原邦太郎、佐藤信重を委員にして追悼詩集「海図」（昭5.7、交蘭社）を編纂した。そして寄稿詩の最初をかざったのは、高村光太郎が「……この火がいつどんな火になるかを誰が語らう、/つひに消えない消えずの火は、/この世の機構の底に目をみはり、/今も太古の純潔を点して/屈強な倫理の腕に圍まれてゐる⁽⁹⁸⁾」とうたった「消えずの火」である。

高村光太郎の住んだ千駄木林町155番地は、丁度、生田長江の借家の真前にあった。高村光太郎が欧米から帰国した明治42年6月には、春月は叔父の要請で帰郷した時期であり、2人が佐藤春夫を介して面識をもったのは翌年のことである。そしてこの頃さかんに、かつて東京美術学校に学びながら篁碎雨の筆名で「明星」に短歌や感想を発表していた人物が高村光太郎であると教えられたであろう。古い家族制度と社会機構に抵抗し、たたかい、デカダンスに身をゆだねた。このような低迷期にも、彼は詩・戯曲・評論・翻訳を書いていたが、春月は明治43年7月の「創作」に掲載した民謡風の味わいのジアン・モレアス「小娘の言へること」を、春月は「名詩名訳集」へ採用している。この時期の高村光太郎の情緒を反映した訳詩なので、茴香草、雛菊草と呼びかけたあとの第3聯を引用してみよう。

さるびあ
撤爾維亜草の言ふことにや、様は待つまい
かはいや、様はあだし手枕して寝てる。
—ああ、さるびあよ。悲しいこといふるさるびあよ、
さ
汝を髪毛ぐるぐる巻きに綱目の憂きを見せたやな。
私
私を不憫と思はんせ。

彼が抑圧された生命感情からくる焦燥と憤慨、頹廃と倦怠の日々を打開するのは、明治44年1月「スバル」に「失はれたるモナリザ」「根付の国」などを発表して以降のことであり、また花世と同じ「青鞥」同人である長沼恵子と運命的な出会いをもつのも同年12月のことである。

東京美術学校出身者ということであれば、柳虹川路誠（明21—昭34）の名前を

挙げなければならない。彼は河井醉茗が詩の選者である「文庫」および「詩人」に「新詩四篇」を発表することで、わが国の口語自由詩の創始者として、後世に名前をとどめることになった。他方、仏蘭西語の達者な彼は、象徴派から新風のイマジズム、未来派、ダダイズムまで積極的に紹介した。とくに見るべきものとして、80余篇の訳詩と評伝を収めた「ヴェールレーヌ詩抄」(大4、白水社)がある。けれども、のちに読み直すとき、彼は満足できず、テキストに選集“choix de Poesies”を使用して、かつての「詩抄」の3分の1を訳し直し、それに新しい訳稿を加えて108篇と詩劇「お互ひ同志」とで1冊の詩集にまとめたが、その際、フランソワ・ Coppé の原序の前に、アナトール・フランス、シャルル・モリス、シュテファン・ツワイクのヴェルレーヌ観を引用してくることで、面目を一新している。そしてこの「エルレーヌ詩集」(大8.9)は大正8年に開始された新潮社の「泰西名詩選」シリーズの第4編にあたり、第1編生田春月訳「ハイネ詩集」、第2編白鳥省吾訳「ホイットマン詩集」、第3編生田春月訳「ゲエテ詩集」に連鎖するものであった。

しかし、春月が泰西の名訳集に選抜したのは、初めの「ヴェールレーヌ詩抄」から2篇「夜の鶯」「女ゆゑ」、大正2年3月の「詩歌」に発表されたポール・フォル「鄙唄」および6月の同誌に掲載された伊太利詩人カルツッチ「夜」である。興味深いことに、2行詩「鄙唄」のみが口語訳で、他の3篇は文語訳からなっている。彼の訳しぶりをソネット「夜」で見よう。

夜よ汝が影暗き^{ヴェール}面幅のうち、静に吾を包めよ
儂き生に疲れたる吾をまた低きわが悲みを。
願くばわが悩をば押拭ひ死の境より呼醒ませ
わが心こそなほひとり^{いまし}汝とともに残らむ。

あはれ、わが希望に裏切り、また再びわが^{たまひし}靈を誘ふは、
え死らざる飲のいかに美しき^{めく}諾約あればぞ、
いかなる力か汝にありて「想」の暗き翼の
此世を羽搏きめぐり、その空しきを知るものぞ。

あゝ聖なる夜、忿怒と情欲との^{しやうげ}障害なき夜
^{いまし}汝によりて現はるゝ^{いまし}予言と黙想との
いかにいぶかしき匂ひなるかを吾はえ知らじ。

されど、吾は^{ふるさと}故郷を汝に求む、悲める^{あかこ}嬰兒が
啜り泣きつも暖き胸の上に眠るがごとく

あゝ祖母^{おむおや}の胸、その古き胸の上に吾は捲かれむ。

尾上柴舟に師事した前田夕暮が「明星」への対抗意識から名付け、主宰した白日社の短歌雑誌「詩歌」（第1次、明44.4—大7.10）には、独逸詩の春月、露西亞詩の昇曙夢の作物が掲載された。大正6年9月の同誌に、春月の訳出した匈牙利詩人ペテフィの「我身もとにも」が、翌年1月にはドイツの哲人ニイチェの「氷山のほとりにて」が他の創作詩とともに寄稿され、これら2篇の訳詩は、そのまま「泰西名詩名訳集」に収められているが、大正2年9月に掲載された昇曙夢訳のチュッチェフ「SILENTIUM」とバリモント「何故？」のうち前者のみが「名詩名訳集」に収められている。3聯からなるその詩の第3聯のみを書き出してみよう。

ただ自己のうちのみ生きよ、
魔法のやうな怪しき思想の世界がある。
真昼の光線は彼等を昏ますであらう、

お前の心には不思議にも
外部の騒ぎ声は彼等を掻き消し、
ただ彼等の歌に耳を傾けて、黙ってゐろ！

奄美大島から鹿児島へ出た時代に希臘正教の洗礼をうけている曙夢昇直隆（明11—昭33）が露西亞語の習得したのは、東京の伝導学校から7年制の正教会附属神学校へ進み、学んだ時代のことである。そしてプーシキン、ゴーゴリ、ツルゲーネフに親しみ、新声社の懸賞論文に応募し、1位に入賞している。また在学中に、春月も通学した夜間の独逸語専修学校で、2年間独逸語とその文学を学んだ。明治36年に神学校を卒業すると、同校講師となり、心理学・論理学・倫理学を講義した。明治43年より早稲田大学で露西亞語とその文学を教え、大正期に入ると、陸軍士官学校等の教授を歴任した。春月が翻訳に手を染めた時期、昇曙夢は、翻訳家としての人気は森鷗外に次ぐほどであった。

露西亞の知識人の挫折感が、欧州を経て、わが国へ伝わりくることで、日清戦争後の精神的状況に類似することから、明治期末より大正期中期にかけて、露西亞文学が盛んに翻訳されるようになった。その頂点にたつのが昇曙夢であり、それに続くのが、米川正夫や中村白葉、松永信や瀬戸義直たちであった。だが彼等の先駆者として露西亞文学の翻訳熱をあおり、後世の翻訳の文体や声調にまで多大の影響を及ぼしたばかりでなく、言文一致の近代文学の道程を拓いた人物こそ、二葉亭四迷こと、長谷川辰之助（文久4—明42）であった。春月は、面白いことに、「泰西名詩名訳集」では仏蘭西の読人不和の「岡を越えて来ませ」とプーシキンの「こひせし人のあはれさは」の訳者名に変則的な長谷川二葉亭をあててい

る。

明治41年6月、二葉亭四迷が「朝日新聞」特派員として露都ペテルスブルクへ出発したとき、彼は上京を果して、文豪訪問を重ねていた。そして翌年5月に肺結核を病んでいた二葉亭四迷が帰国途中の船内で没したとき、彼は生田長江の世話になっていたが、異常にやせ、痰に血が混じり、肺結核でないかと恐れ、文壇への足がかりを得ないまま、養生を目的に帰郷を考えていた。この前後の文学修業時代を通じて、二葉亭四迷は彼の研究対象となっていた。明治41年に限定した場合でも、大阪の下宿で、「趣味」1月号に掲載された「血笑記」、最も愛読した「文章世界」2月号掲載の「私は懐疑派だ」および6月号掲載の「予が半生の懺悔」が彼の眼にふれている。それどころか、すでに述べた彼の小説「秋本と竹友」において、「僕ね、二三日前にカルコ集を買ったよ。」「さうですか、あの翻訳はぜひ一度は見るべきものですね。」という2人の会話で、話が進展している。⁽⁹⁹⁾ここでは、「カルコ集」という書籍の著者名と訳者名が記されていない。これは、竹友藻風が春月を最初に訪れた時期、つまり明治40年12月、春陽堂より発行されたゴルキイ「ふさぎの虫」「二狂人」とガルシン「四日間」「露助の妻」を収録する二葉亭四迷の翻訳集である。春月はゴルキイの作品を幾度となく読んだようだ。明治41年2月27日の日記に、「夜遅くまで読書する。『二狂人』（ゴルキー原作、二葉亭訳）を読んだ、物凄いな作だ、文調と内容と相一致してゐるところがいい」という読書感が記載されている。この強烈な印象は薄れることなく、日本人作家の独創性の欠如と模倣性に関連して、明治42年1月22日の日記で、「正宗白鳥の『地獄』はゴオリキイ（二葉亭氏訳）の『二狂人』そっくり其俚也、薄っぺらなもの也」と指摘し、あわせて田山花袋の「白紙」がアンドレイエフの「嘘」（山本道草訳）より文章を盗用していると弾劾している。またこの頃二葉亭四迷の他の訳書をさかんに読んでいたのか、同日の日記帳にツルゲエネフの「浮草（ルディン）」より「聖の身にも、世に経れば、/憂事しげき、ありはてぬ、/命待つまのそのほども」を書きつけ、プウシキンの詩句「恋慕の人のかなしみは/春の日長も、/絶えずてふ/昔思へばかこたれて、/浪たちさはぐ心には/四季の木立もうつつべき、/ただくやしとぞ事ふりし/涙せヨあえぬ嘆きなれ」を暗誦している。また詩人の伝記を愛好していた春月は、明治41年5月、「文章世界」の増刊として出た「近代三十六文豪」を通じて詩人達の伝記を識り、添えられた写真を眺め、「少年の日の私の意見によれば、その境遇はゴオリキイに、その性格はルソオに、さうしてその鼻はツルゲエネフに似てゐた！⁽¹⁰⁰⁾」と無邪気に喜んだ。そして「私がツルゲエネフの作品に親しんだ初めは何であつたらう？多くの人々と同じく矢張り

二葉亭主人の名訳によってであった。『片恋』や『あひびき』や『浮草』（ルーゼン）などは上野の図書館に毎日毎日通ってゐた時分、借りて読んだ。『片恋』のあの『恋する女の眼といふものは……』という名文のあたりなどはわざわざノオトに書き写したものであった。『浮草』は大分繰返して読んだ⁽¹⁰¹⁾と、大正8年2月に回想している。二葉亭四迷の翻訳した28篇の小説のうち8篇がツルゲエネフの作品で、詩人の人間本性に対する深い理解と自然に対する融和感が翻訳者の繊細な描写の筆へ伝わり、新鮮な感覚で、春月をはじめとする日本人読者を魅了したのである。またその感激の記憶から、春月はレクラムの独逸語本を使用して、比較的早い時期に、ツルゲエネフの「初恋」（大3.9）を、レクラム本やカッセル本に倣った小型本翻訳叢書「新潮文庫」の第6編として、刊行した。これは、また大正7年から4年がかりの「ツルゲエネフ全集」（全10巻）の第3巻に収められ、さらに第9巻に「春の波」（大10.2）を新しく翻訳している。このほかに「散文詩」（大6.6、新潮社）や「おとづれ」（大6.4「文章倶楽部」）を翻訳紹介している。またゴオリキイの「強い恋」（大4.5、新潮社）や、「人生の面前で」（大6.5「文章倶楽部」）を重訳で発表しているのも、二葉亭四迷の手引きによると言ったら、言いすぎになるであろうか。

ところで、二葉亭四迷は、はじめ外交官をめざして明治14年に東京外国語学校露語科へ入学した。けれども、猫の目のように学制の変更が行われた時期にあつたため、一半は東京大学予備門へ、また一半は東京商業学校の附属学部へ移管され、廃止が予定されていたので、半年後の卒業をひかえて、明治19年1月に彼は中途退学した。これに対して、米川正夫は、一度廃校になったあと、明治30年に再興された高等商業学校付属外国語学校を明治45年に卒業した。米川正夫（明24-昭40）は在学中より露西亜文学の翻訳と研究を始めているが、翻訳者として名声をあげたのは、大正6年より10年にかけての新潮社刊「ドストエーフスキイ全集」（全11巻）のうち4巻を担当して以降のことである。大正4年から次年にかけてのトルストイ「戦争と平和」（全6巻）は、同書肆の営業上の理由に協力して、名目だけ、昇曙夢との共訳という形式をとらなければならなかった。さて、春月は米川正夫がまだ発表誌として「詩歌」しかもたなかった時代から、その大正元年9月のフヨオドル・ソログラブ「無題」と翌年3月のレルモントフ「小曲」を採用している。

ここで、今、もう一人の東京外国語学校卒業生の名前を挙げなければならない。それは明治36年に独逸語科を卒業し、長崎医専、小樽高商の助教授、慶応大学予科等の教授を歴任した蘆風秋元喜久雄（明11-?）である。彼の名前が忘れがた

いことは、春月の編んだ「泰西名詩名訳集」で、彼の訳詩が8篇に達していることでも、端的にわかる。と言うのは、彼が春月に独逸詩のすばらしい世界を開示してくれた人物だからである。かって春月に語学の学習を勧めたのは田山花袋である。彼に英語の手ほどきをしてくれたのが生田長江で、英文学の世界へ導いてくれたのは小林愛雄であった。また独逸語を選ぶ契機を与えてくれたのも生田長江であったが、独逸文学の広大な美的世界へ連れ出して、彼の希求するものを提供してくれた人物こそ、小林愛雄が1期生として卒業した岡山の六高で独逸語講師をしていた秋元蘆風であった。

秋元蘆風は、在学中の明治34年から、「新声」や「文庫」に新体詩や訳詩を投稿しはじめた。今日、最も早く活字にされた訳詩であると確認できるのは、明治35年2月の「文庫」に虹浪の筆名で訳したシルレル詩「若人」である。とくに、六高講師時代の明治37年9月の「文庫」に蘆風のペンネームで、総題「西花余香」のもとに、レーウェ「山うばら」、ウーラント「舟路」、作者不詳「さだめ」を發表し、10月にはガイベル「二つの胸にわかるる時」、ベッケル「伶人がさまよひの歌の中より」、リュッケルト「夕の平和」を、11月にはゲーテ「慰藉の涙」、シュンクンドルフ「オレンジの花に寄する歌」を連載した。また同時期まで訳し集めたシルレル詩2篇、ケルネル詩21篇、レーナウ詩9篇、ゲーテ詩8篇、アイヘンドルフ詩10篇、ウーラント詩9篇、ギルム詩3篇をまとめて、訳詩集「紛紅集」(明37.6, 日高有隣堂)を刊行した。これは白水郎三浦吉兵衛訳「西詩余韻」(明35.8, 尚文館)について、独逸詩の精髓を原詩とともに賞味さすものであった。彼は、翌年にも、アイヘンドルフ詩5篇、レーナウ詩4篇、リュッケルト詩3篇、ウーラント詩2篇、グルアイフ2篇、シルレル詩2篇、そしてシェンクンドルフ詩、ロエーウェ詩、ガイベル詩、ゴエーテ詩、グライム詩、フランクル詩、ヘルデル詩、ベッケル詩、および作者不詳の詩が各1篇と自作詩14篇を収めた「野葡萄」(明38.12, 日高有倫堂)を發行し、以後も精力的に「シルレル詩集」(明39.1, 東亜堂)、「鴛鴦曲」(明40.6, 佐久良書房)、「樂劇タンホイゼル」(明44.10, 精華書院)を世に問うた。

さらに春月が、明治44年秋から1年半ほど独逸語専修学校へ通った前後、秋元蘆風は「独逸語学雑誌」に独逸抒情詩の解説紹介を始めていた。明治43年夏、数回は、単なる訳詩の掲載にすぎなかったが、同年11月には初めて近代詩研究と名付けて「デーメル」の神秘詩『沼上吟』を、次号に「エルレーヌの『秋の歌』」を注釈した。ひきつづき、翌年1月から2月にかけて「独逸抒情詩人(クロップシュトック以来独逸抒情詩の経路)」と題して、詩史を企画したが、2回で中断

した。3度目は「独逸語学雑誌」の第14年第1号(明44.9)から第16年第1号(大2.9)にかけての「独逸詩歌講義」シリーズに成長した。第1回では「リリエンクローン、グスターフ・ファルケ」を取り上げ、1ヵ月休んだあと、明治44年11月には、第2回として、シルレル作希臘の神々を論じ、以後、「シルレル及びゲーテ譚詩資料」「ハイネ作『歌の翼の上に』」「アイヘンドルフ作『あこがれ』」「ヴィーラント作『春の歌』」「リリエンクローン作『告別と帰郷』」「ピーヤバウム作『汝、わが祖国』」「シュトルム作『秋』」「ヘッベル作『樺の森の歌』」「ホフマンスタール作『早春の歌』」「シルレル作『イビスクの鶴』」「ゲーテ作『樂人』」「ウーラント『楯負ひローラント』」「ウーラント作『盲目の王』」を講じた。この連載を核として、彼は「独逸名詩評釈」(大2.3, 精華書院), 「独逸詩歌講話」(大3.6, 南江堂), 「現代独逸詩人」(大4.9, 南江堂)を連続して公刊した。また同時に、文法書として「独逸語自修講話」(大2.4, 弘文館書店)と読本の自習書として「独逸語自由自在」(大3.7, 東亜堂)を執筆しているが、後者の第5篇ではアンデルセンの小品3篇とツルゲーネフ散文詩3篇, 第6篇でホフマン・フォン・ファルレルスレーベン詩11篇, 第7篇でキヨルネルの愛国詩2篇, ロベルト・ライニック詩2篇, ゲーテ詩2篇, ハイネ詩2篇, リリエンクローン詩1篇, ヴェルレーヌ詩1篇を教材にして註解を付している。春月がこれら語学参考書を利用した可能はないとしても、語学雑誌を使用し、秋元蘆風の著作で文学研究したことは疑う余地はない。「泰西名詩名訳集」巻末の「訳詩について」の中で、上記の訳詩集の名称が挙げられ、また「現行名訳詩集書目」の中で、とくに「独逸詩歌講話」に関して、春月は「多年独詩の紹介に努められた秋元氏の事業の集大成とも見るべく、クロプストック等より最近に至るまでの独逸詩人の作を原作と対訳せるもの⁽¹⁰²⁾」と語っている。そしてこの書よりリリエンクローン「六月のよき日」「畑中の死」を選び出し、また春月は「野葡萄」からシルレル「ヘクトルのわかれ」を、「独逸名詩評釈」からアイヘンドルフ「あこがれ」とガイベル「四月に」を採り出して独逸篇へ嵌め込んだ。さらに明治41年5月の「中央公論」で、プーシキン、トルストイ、レルモントフの詩8篇からなる「露西亜詩華」のうち、「プーシキン名篇、独逸訳に據る」とことわっている作品、「うぐひす」「花」「末咲」を露西亜篇へ加えている。

夜学で、1年半の普通科の課程を終えると、春月は年限1年の高等科へ進むことを断念し、あとは語学雑誌と参考書を活用しながら、ひとり研鑽を重ねた。ところで、春月が独逸詩の翻訳を最初に発表したのは、就学して1年もたたぬ明治45年8月のことである。ウーラント作「旅がえり」は、いったん「帝国文学」誌

上に活字にされたけれども、残念ながら、世人の眼に触れなかった。なぜなら、明治天皇の崩御をはばかり、同誌は発売されなかったからである。そのため、春月の訳出した独逸詩が、同誌に掲載され、初めて文学愛好家に読まれたのは、大正2年7月のことであり、それはファルケ「敬虔」、ヤコボウスキ「碑銘」、ダキット「道ばたで」の3篇である。

碑銘

「眼に遠く、心に近く」

うもれたる大理石にして、
我れふるき碑銘を見しとき、
我がなき恋人を思ひ出でぬ……

あゝ神よ、我れすでに千たびも書きぬ
ひとしき歌をひとしき悩みより、
されどその一つだにこれ似ざりき。

「眼に遠く、心に近く」

だから、彼が発表した最初の独逸詩は、形の上で、「東亜之光」誌上のレナウ「ねがひ」「Heineより」(大2.2)となるのである。

「泰西名詩名訳集」には、これらの詩篇のほか、諸雑誌から訳詩が収集された。「東亜之光」から、さらにリエンハルト「信仰」(大2.10)、キッケンブルヒ伯爵夫人「幹と夢と」、ヴェルレエヌ「カスバル・ハウゼル」(大2.11)という作品が、「スバル」からはニイチェ「秋」が、「新潮」からハイネ「安息を喘ぎ求めて」、ヘルデルリン「昔と今と」(大6.11)、ニイチェ「孤独」(大6.11)が、「詩歌」からはニイチェ「永山のほとりにて」が、また「文章倶楽部」からゲエテ「シチリヤ人の歌」「春が来て」(大8.4)、ペテフィ「我身もともに」(大8.6)が集められた。また明治期末の彼の英文学研究の成果から、すでに言及したクリスティナ・ロセッチの「若しも」(明41.12「新声」)、「悪夢」(明43.3「火柱」)、「ねがひ」(明43.9「新文芸」)やワイルドの「キイツの墓」が加えられた。しかし、これらすでに発表した作品および準備した80名近い翻訳者の作物だけでは、詞華集として十分でないよう思われた。そこで彼は、過日、翻訳を試みて筐底におさめていた草稿の改訳をくわだてるとともに、多様な変化に富ますため、新しい訳稿を多数ふやした。言うまでもなく、独逸篇にゲエテ「希望」「美」、ハイネ「たのしい春」「悲劇」「回顧」「少女に」「葦と薔薇」「星」「春の歌」「空色の謎」

「最後の願ひ」「疑問」、ノヴァリス「聖歌」、ウウラント「春の讃歌」、リュッケルト「恋の春から」「うた日記」、アイヘンドルフ「郷愁」、ワグネル「水夫の歌」、ニイチェ「断片」「旅人」、リカルダ・フッフ「郷愁」「おもひで」「少女の夢」、ハンス・ベトゲ「郷愁の歌」、ウェデキント「地霊」が加えられて、彼の訳詩は37篇に達している。奥太利篇には、レナウ「あしの曲、その二」、グリルパルツェル「きす」が加わって、彼の訳詩は5篇となる。匈牙利篇に「酔人」「少女にあたふ」「恵まれし人」が加わりペテフィのみの作品で4篇である。露西亜篇はプウシキン「小曲」、トルストイ「無題」と、大正6年6月に刊行したツルゲエネフ「散文詩」より短篇「何を私は考へるだらう」「明日は、明日は」とで4篇である。希臘篇に彼はアナクレオンの3篇「年とった若もの」「娘さんがたへの答」「飲まねばならぬわけ」を添え、諾威篇にイブセンの2篇「建築の計画」「消えてしまった」を足し、また仏蘭西篇に散文詩「港」を加えて2篇とした。そして伊太利篇にレオパルヂ「詩集より」、西班牙篇にベッケル「小曲」、丁抹篇にアンデルセン「母の夢」が添加された。その結果、英吉利篇の4篇を算入して、総数で64篇に達している。しかしながら、その詩稿の占める割合は詞華集の18パーセントで、過多の印象を与えるほどではない。

春月の編纂した「泰西名詩名訳集」では、さまざまな動物、植物、天然現象から、多種の階層、年令、職業の人間とその人間的感情と靈的出来事に至るまで、詩の主題とモチーフの織り込まれた作品が網羅されている。また民謡・俚謡から牧歌・輪舞歌まで、聖歌・祝歌から挽歌・鎮魂歌まで、抒情詩から散文詩まで、二行詩から一四行詩まで、あらゆる種類の、あらゆる詩型の作品が、モザイク模様のように詞華集へ嵌め込まれている。同時代のどの詩人よりも散文詩に関心をもって研究と創作に始めた春月は、「旧約聖書」の世界から「詩篇」や「耶利米亜哀歌」ばかりでなく、「伝道者の言」から「幸福ある日には樂禍患ある日は考へよ」というアフォリズム的な一行を引用することを恐れない。詩的な素材内容をリズムを有する言語作品は、墓碑銘であろうと、春月の詩情に訴へ、詩思ははぐくむものである。その点においてのちに京都帝大総長となる考古学者の青陵浜田耕作の業績も、春月にとって恵みの収穫でありうる。春月はサッフオの作品でありながら、うかつにもアナクレオンの作品と誤り、訂正せざるをえなくなった「漁夫の碑」を筆頭に、メレアグロス「兎の碑銘」、フィリップ「愛児の碑銘」、読人不知「フィロストラタの碑銘」、および殆んど碑銘を呼んでかまわぬコリアノスの会話体の詩「死」の5篇を収集している。

兎の碑銘

我は足敏き長耳の兎、なほ幼き時我が母の懐より、
吾を取去りて、其の胸に抱きつつ和膚の乙女
ファニオンは、春の日のかぐはしき花もて我をはぐくみぬ。
されどなほ、足乳根の母の慈愛は無かりしか
饗応の多きに過ぎて、肥えふとりてぞ我は失せぬ。
いまの彼女の部屋のほとりに葬られぬ、
夜毎の夢に床近く、我が墓を見むがため。

飼い主ファニオンが追悼するのではなく、死んだ兎が1人称で追想する形式をとるこの碑文は、こまやかな愛情もさることながら、詩才が光り、ユニークである。これらの碑銘を春月がどこに発見したのであろうか。浜田青陵（明14-昭13）は明治38年に東京帝大史学科を卒業し、ひきつづき大学院で考古学を研究し、大正元年から3年間、欧州に留学し、英仏伊希で研究した。その一部が「希臘紀行」（大7.7、大鑑閣）と「南欧遊記」（大8.10、大鑑閣）で記録されている。だが、春月の引用した碑銘の出典はこれらの中にはなく、同時代の何かの雑誌に寄せた紀行文または学術的読物の中にあると思われる。

このように、「泰西名詩名訳集」所載の作品であっても、出典個所がつまびらかでないものが相当多数存在する。今日、可能なかぎり多数の関係雑誌や書籍の検索を行っても、完全に究明することができない程である。それは、春月がどれほど多種で広範な読書を行い、そしてどれほど小まめにノートをとっていたかということのあかしでもある。だから、一方で、春月編の詞華集に載っていて、個人全集版に収録されていないことがわかり、あらためてその全集の補遺に2篇の訳詩が加えられた森鷗外のような場合もある。だが、他方、これに関連して、訳者名の誤記や失名氏訳の問題が生ずる。多数の作品をノートへ転記する段階で、訳者の記載を何らかの理由で逸し、後日、欠けた人名を思い出す時点で、類似点が多いことから、名前をとり違える危険が発生した。これは原作者のとり違えの場合にも該当する。だが、最悪の場合は、訳詩者の氏名を完全に失念したきである。今日の常識であれば、逸名氏の作品など、詩集から削除すべきであろう。総数357篇のうちの7篇にすぎないとは言え、詞華集の瑕瑾である点では変りなく、当然のことながら、春月も削除を考えた筈である。それにもかかわらず、ワアゾワアス「我心躍る」、コントポオル・ド・レセギエ「一少女の碑銘」、シルレル「狭きふしどの幼子を」、ノワリス「日記より」、ジナイイダ・ギッピウス「水蛭」、ハイデンスラム「火花」、パラダス「断章」を収録したということは、それ相応の理由をもつに違いない。恐らく収録しないことによる利点よりも、瑕疵をもち

ながらも、収録することの利点の方が優ったのであろう。

火花 佚名氏訳

火花は住む、吾が胸のいと深き底の神龕に。
其火花、それをともしばわが願ひは足る。
吾が初の、終の、わが生涯の、之ぞ吾が火花。

逃れゆく火、いまし尽くれれば吾は衰ふ、
今も尚いまし失すれば吾富は凡て消ゆなり。
小さき其火花—それぞ吾生涯の悩みなり。

この詩篇を一読してみれば、捨てがたい魅力に蠱惑され、名訳詩者の氏名を欠いても、なお、「名詩名訳」という試金石に叶うことに気付き、編者春月の賢明な取り扱いに賛同したくなるのではあるまいか。因みに、「失名者」という方便は、大正期末までの詞華集の中で、望ましくないけれども、かなり大胆に散見する。

また、ここで、次に春月のアンソロジーが、完璧な「泰西名詩名訳集」になりえているかどうかの問題も生じよう。東西の文学に博識の木村毅は、大正14年6月の「新小説」誌上の「明治大正雑著濫読抄」の中で、「生田春月氏の編輯された『泰西名訳詩集』は、吾々の全然知らない、珍しい訳詩まで数多く収めてある点で、まさに感謝に値する出版の一つだが、多少補遺を試みたい点はある⁽¹⁰³⁾」と語っている。そして「補遺を試みたい」数例として、大和田建樹の英グスリイ「三人の海士」、大西操山のキングスリおよび内村鑑三の「愛吟」中の訳詩が採録されていないことを指摘しているが、「愛吟」に関して、「上田敏博士の『海潮音』と出来栄を競ふやうな名訳がある」という発言を聞くと、明治に生まれ、明治の新体詩の土壌で詩情をはぐくんだ人達の美意識を垣間見る思いがする。また内村鑑三の愛読者であった木村毅は、「初め『櫟木集』に出て、後に『平民詩人』におさめられたホイットマンの詩の節訳にもすてきによいものがある」と悔んでいるけれど、彼の推奨するホイットマン詩の採録を、春月が訳詩者の氏名を感違いうするという不幸な形で実現し、その意向を叶えている。

しかし、木村毅にかぎらず、明治・大正期の訳詩集を愛好し、文芸雑誌掲載の訳詩を収集する者ならば、春月と異なる基準と美意識から別種のアンソロジーを編むことが可能であろう。しかし、そこでは、新しい問題をかかえることになる。例えば、英文学に限定してみても、なぜ宮崎湖処子の「ラルズルス」(明26.10, 民友社)や浦瀬白雨の「ウォルツユスの詩」(明38.7, 隆文堂)が欠けているのか、なぜ田山花袋の「キイツの詩」(明38.10, 隆文堂)や金子南冥のキイツ「幻

精賦」を逸しているのか、なぜ入江雅次郎の「テニソンの詩」(明38.6, 文学同志会)や若月紫蘭のテニス詩「除夜」(明45.1「婦人界」)を落しているのか、なぜ木村鷹太郎と高橋五郎のバイロン詩がないのか、なぜ山村暮鳥と日夏耿之介のワイルド詩が無視されたのか、またなぜ翻訳の名家である戸川秋骨、平田秃木、植村正久、大谷繞石、山懸五十雄、辻村鑑、山田櫛郎、相馬御風、三富朽葉、今井白楊の名前が見当たらないのか、さらになぜ春月と同郷人の高浜長江、加藤朝鳥、須藤鐘一、佐伯樞香の反訳が採用されないのか、といった疑問が次々と提出されるであろう。そして独逸文学においても、なぜ森鷗外、阿部次郎、橋本青雨、原青草、おぼろづきよ、塩釜天飴、生田春月のみで、桜井天壇、片山孤村、山岸求園、山本迷羊あるいは同郷人の秋田実や亀尾英四郎のゲエテ詩が加えられないのか、なぜ春月の訳詩集「私の花環」(大9.9, 新潮社)に収録されているレッスン、メリケ、シュトルム、シャミュッソー等の作品が採集されていないのか、といった問いが投げかけられるであろう。いわば、そこでは、十人十色のアンソロジーが産み出される余地が生ずる。またそこで春月の詩の採用方法に対して厳しい批判と非難が加えられることにもなる。

矢野峰人は「日本現代詩大系」第5巻の巻末で行った解説の中で、「彼が大正の半ば頃公にした詞華集に『泰西名詩名訳選』と『日本近代詩集』と題するものがあつた。孰れもその表題に応はしからぬ玉石を混淆せるものであつた⁽¹⁰⁴⁾」と、切りすてる。「泰西名詩名訳集」に限定した場合でも、玉石混淆の事実を、ある程度まで認めなければならぬ。それは原詩と訳者の組み合わせからくる出来ばえの次元ばかりでなく、その引用個所と表記方法まで考慮に入れて、拙悪な作品が含まれているということである。春月が趣味に合致する訳詩を任意に抜萃し、書きとり、保存していたノートを、作詩の研究と別途の目的に使用するのであるから、テキスト批判の立場から、吟味するとき、原著にある句読点の脱落、およびあてた字の相違という事象も起きており、問題点がある。最悪の場合は、シェイクスピア「オフィリヤの歌」その二である。

〈オフ どうぞな、もう何にもいいで。したが、もし何の事ぢやと問ふ人があつたら、ま、斯ういはしませ。〉

(歌ふ) あすは十四日ヴレンタインさまよ、
門へ行こぞや、引明方に、
ぬしのお方おなたになろずもの。
それと見るより門の戸あけて、
ついと手を取り引入れられりや

純潔の処女うぶぢゃ戻られぬ。むすめ

〈王 はて、いちらしいオフィリヤ!〉

〈オフ え、実! 誓文なしに、つつともう歌うてのけよ。〉

(歌ふ) ほんに思へば、思へばほんに、
なんぼ殿御の習ひちやとても
それはあんまりどうよくな。

〈男がいふには〉

おれも誓文その気でるたが、
一夜寝て見て気が変はつた。⁽¹⁰⁵⁾

括弧でかこんだ個所が春月の詞華集で欠けている。他の文とせりふとを区別して、オフィリヤの歌で統一しようとするならば不完全に終り、本来なら最後の2行も省略しなければ、意味の統一がとれない。だが春月は男女の際どい感情の絡み合い、さらに男の冷めた気持をアイロニカルな2行で表わしたいがため、原作の人物設定をくずし、翻訳者の承認も得がたいような2人だけのせりふ交換に変えて、戯曲の中から剔出している。このように乱暴な引用の仕方は、たとえ面白い特異な趣向であろうとも、疑問である。別種の引用方法がある筈だ。

ところで、矢野峰人が、春月の編んだ2冊の詞華集「泰西名詩名訳集」と「日本近代名詩集」の書名を、すでに誤記し、正確に通読したことがあるのか、いささか疑惑が生じる。だが、再度、彼の文学的自叙伝と呼ぶべき「去年の雪」(昭30.4, 大雅書店)の中で、「悪詩拙訳が大部分を占めて居り、その点聊か羊頭狗肉の嫌ひ⁽¹⁰⁶⁾」があると主張するとき、彼の立場が明白となり、重ねて「世界名詩選」(昭36.3, 毎日新聞)で、類似することを語る時、学匠詩人と称せられている彼の批評的基盤はゆらぎ始める。批評家は、全能のオリンポス神にも似た権能を有する。だが、客観と公正の実証性を放棄するならば、いかにすぐれた業績の学者であろうと、信頼性を失いかねない危険性をもつ。矢野峰人が、一方で「泰西名詩名訳集」の春月を攻撃することで抹殺しようとするならば、他方、明治期末の「文章世界」をはじめとする文芸雑誌の投書家について、「明治詩壇回顧」(昭50.3—51.3 昭和女子大学「学苑」)等で論ずる際にも、意識的に、それどころか積極的に黙殺する。この点、峰人矢野禾積(明26—)と同じ美作生まれの雷音木村毅(明27—昭54)は、「最後の投書家あがりの文士⁽¹⁰⁷⁾」を自任し、同じく貶下されがちな投書家あがりの春月と仕事のうえで軋轢をひきおこしたことがあるにもかかわらず、春月に対して、称賛をしない代りに、底意地の悪い非難も行わない。

春月に対する矢野峰人の穏当を欠く露骨な反感はどこからくるものであろう

か。人格的欠点の多い春月が、生前、彼に礼を逸する振舞いをしたり、不当な批判でも行ったのであろうか。恐らく、彼に対して春月が見せた冷やかな詩的評価への反感ではないだろうか。大正9年12月14日の「読売新聞」で、春月が「詩壇一年の回顧」と題して、盛名ある詩人や新進の詩人に対して好意的批評を加え、激励しているのに比べて、『水甕』の詩人矢野峰人氏は『黙禱』を出したが、未だ認められてゐない」としてしか語っていない。京都帝大の大学院特選給費生であった矢野峰人は、前年4月に第1詩集「黙禱」（水甕社）を発表していた。その時期は、春月編「泰西名詩名訳集」（大8.4、越山堂）の発行の月でもあり、また姉妹的詞華集「日本近代名詩集」（大8.3、越山堂）の刊行1カ月後にあたる。そして2種の詞華集へ、矢野峰人の精神的作物は採録されていない。彼の「小甕は破れぬ」をふくめた4篇の新体詩が初めて「文章世界」（明41.11）に掲載された時期、春月は「文章世界」投書期を卒え、東京で詩壇に足がかりを見つけるべく、苦闘していた。そして大正元年に津山中学を卒業して、東京の正則英語学校で斉藤秀三郎たちの講読をうけているところに、三高の無試験検定入学許可の報せが入り、成瀬無極の独逸語授業を聴きはじめたとき、春月は夜学で独逸語を学び始めて1年を経過していた。これを機会に、矢野峰人は「文章世界」の投書をやめ、回覧雑誌「楯」や短歌雑誌「水甕」を中心に、また春月のあとをおうように「帝国文学」「スバル」「朱樂」等へも詩を投稿し、厨川白村や上田敏の薫陶をえながら、未来の詩壇を担うポエタ・ドクトゥスとして着実に成長し、注視を浴びていただけに、上田敏門下の竹友藻風と出野青煙に比して、不当な取り扱いを受けたと感じたのであるまいか。並はずれた高邁な精神と鋭敏な感受性の詩人達は、彼等の産み出した美的作品が正当に評価されることを願う。その一点により、すでにのべた詩話会も、島崎藤村誕生50年祝賀会を開き、記念として「現代詩人選集」を編んだが、その人選に非難の声があがり、分裂した。詩壇というわずかの芸術家達で構成される世界では、選に入るか、もれるかということは、想像以上に重視され、鈴蘭同人原輯、斉藤潔新纂、日夏耿之介修訂で、「明治大正詩史」巻の下附冊とした「明治大正新詩書概表」（昭4.11、新潮社）があらわれたときの記載もれのあった人達の憤慨から一種のパニックまで起ったことを忘れてはならない。春月自身も、新潮社から「現代詩人全集」全12巻（昭4.7-5.7）が刊行されることになった折、新潮社に近い春月に人選の決定権が託されていると誤解され、いわれなき批難をうけ、おかげで、その月報に筆者名を入れなくて原稿を掲載しなければならないこともあった。またある時には、交蘭社発行の文芸雑誌「愛誦」から主宰者の西条八十が離れたことから、春月が次期主宰者

と感違いされ、詩壇仲間から意地悪を言われたことがある。これらの背景事情を知ったうえで、竹友藻風の作品が、「泰西名詩名訳集」で1篇採用され、「日本近代名詩集」で「祈祷」「夕月」「世界のひと」の3篇が採用されている事実と合わせて考えるとき、矢野峰人の心中穏やかならぬものが、初めて理解できる。そしてそこから、「彼には、特に秀でたる才能、取立てて言ふべき程の独自なるスタイルが無かった」とか、「彼が親炙せるハイネは、我国に移入されて以来伝統となれる感傷の半面に過ぎず、諷刺詩人としてのハイネに至っては、遂に彼の理解し得ざる所であった」とか、「何はあれ、彼はマイナー・ポエト小型詩人の典型なるものである⁽¹⁰⁸⁾」とかいう事実⁽¹⁰⁸⁾に反した、しかも批評をこえた臆面もない罵倒の言葉がうまれ来ているのである。象徴詩が君臨する主流に棹さすことはなかったとしても、着実な詩論と詩作をもって詩壇で活躍し、また外国文学の紹介の領域でも同時代人達に多大の影響を与えた春月に対するあらわで不自然な敵意はどこからくるものか、単なる非難でないだけに、なお把握しがたい。もし矢野峰人を詩才としてしてではなく、単なる詩工としてしか評価しなかったという理由以外に、春月の側に原因があったとするならば、それは矢野峰人が岡山県人であったせいかもしれない。極めて不快な個人的経験が岡山県人と結びついて、春月に思い出されることがある。春月が韓国の密陽から帰国したあと、6歳年上の姉たけのは三浪津へ移り、岡山県のある男性と共同生活を始めていたが、明治42年1月15日に姉から手紙が舞込んだ。「余は思はず悄然とせり。三浪津を離婚して、こたび又局の山腰氏に嫁す由也。余は始より、案じゐたり、井ばらの岡山の者なるを聞きてよりなりき。いづれば岡山県人特有の薄情漢なるべきか、あはれわが姉よ。山腰氏は温厚の人なればさる事はあるまじけれど、余は姉の一生の薄幸なるを思ふて泣く。」たけのは岐阜県古川町出身の竹腰健次郎と結婚するが、間もなく異郷で病死してしまう。この個人的感情がどうして一般的県民性の表象へ飛躍し、またその怨念がいつまで持続したのかわからないが、その後、岡山県人にあまり好意的でないことを漏したこともある。矢野峰人と同じく岡山県人である木村毅とも、同世代の文人として、翻訳の分野で協力しなければならぬ仕事をもつこともあった。春月は、大正14年10日12日の、「国民新聞」に「温かき心、小さき者への愛——木村毅氏の『兎と妓生と』」と題して、朝鮮を舞台にした小説を好意的に批評しているが、木村毅が「世界文学全集」全58巻（昭2.3—7.8、新潮社）の刊行を企図したとき、「また生田春月も相談にのって、アメリカ嫌いの彼は、極力ニューイングランドの作を排斥したが、私はホーソンやポーをのぞいてはならぬことを、最後まで主張した⁽¹⁰⁹⁾」。この場に來合わせた松尾啓吉は、木村毅が一方向的にしゃべる

だけで、春月は不機嫌そうに一言も口をきかず、おし黙ったまま、2時間余り、煙草だけを吹かし、その吸いがらを火鉢の灰の中へずらりと突きたてていた有様を目撃している。

さて、矢野峰人の「悪詩拙訳が大部分を占め」という言葉は、明らかに、誤謬であるとしても、英語がさほど得意ではない春月の選んだ英米の訳詩の中には、「悪詩拙訳」も混入していることは否定できない。いま、春月の詞華集にあらわれた訳詩者で、矢野峰人の「世界名詩選」で採られていないのは、英米文学に関して見ると、坪内逍遙、高山樗牛、尾上柴舟、小原無弦、高田梨雨、太田善男、生田長江、小林愛雄、西村酔夢、児玉花外、奥栄一、畔上賢造、中村詳一、柳宗悦、内山鑑三、佐伯花香といった人達である。その代わりに採用しているのが、増田藤之助、松浦嘉一、福原麟太郎の訳詩である。これらを顧みるとき、矢野峰人が「拙訳」と呼ぶものが那邊にあるのか、おぼろげながら輪郭が浮び上りはじめる。しかし、無名の翻訳家の作物であっても、心ひかれる佳篇に出会えるのである。その好例が花香佐伯左源次のロングフェロオ詩である。

夏の雨（節録）

ああよい雨だほこの上に
暑さの後にほてつた通りに
場末の小路にああよい雨だ

屋根をうつのは蹄の音か
樋の咽喉^{のど}から溢れて出るよ
先を争ひ吹き出て行くよ
窓の硝子をしぶきにしぶく
広いぞ早いぞ泥吐く波は
小溝を河とうなつて行くよ
ああよい雨だ

患者は窓からつくつく見るよ
もつれて流るる小川の水を
湿りに身体^{からだ}も涼しくなつて
乱れた歌のやすまる事は
雨のお蔭にそりや違ひない。

この声調のすぐれた口語詩を、春月は11篇の泰西詩からなる「世界詩選」（大3.5、自家発行）の中に見つけている。この一書を、筆者は東京大学中央図書館所蔵の南英文庫の中で発見したが、発行所が熊本市新屋敷町374番地におかれ、寄贈した大正5年3月の時点では、現住所は大分県別府町になっており、それ以上のことは不詳である。

次に、矢野峰人が選んだアリンガム、アーノルド、オースティン、コリンズ、ダン、 그레이、ヘリック、ハウスマン、ラヴレス、マーヴェル、オシヨーネシイ、ヴォーン、ウェバーという有名無名の詩人はわかっても、カウバア、ランダア、

ワイルド、メレディス、ヘンレエ、ゴッス、ガルスワアシー、ポオ、ロングフェロオ、ホイッチャア、ロオエル、ウィイバアという春月が選んだ英米の詩人を、彼が不採用にした理由が理解しがたい。彼は「悪詩」として遠ざけたのではない筈だ。それでは「名訳」をどのように考えているかと言えば、「独立した創作としての鑑賞に堪えるもの」をその第一条件とし、それにダンテ・ゲイブリエル・ロセッティの言葉を援用して、逐字訳と区別されるような「新しい国民に、新にひとつの美を与える」忠実訳を理想とし、上田敏の思念「翻訳は文芸である、『独案内』ではない」を重視することにある⁽¹¹⁰⁾、という。これを言葉通り受けとるならば、原詩が「名詩」かどうかは第二義的で、もっぱら翻訳された次元において「名詩」かどうかが問題となるのである。そして上記のような「当然収むべき詩人で本集に洩れているもののあるのは、或は然るべき邦訳がなかったか、或は何等かの事情により、私の欲するものに対し転載の許可を与えられなかったためである⁽¹¹¹⁾」と弁明している。その弁明を認めたくても、なおかつ名家の名詩や代表作が欠け、また詩人と詩篇の選択に偏りが生じ、春月の詞華集編纂から42年経過しながらも、訳詩者の新風に乏しく、現代語訳よりも、文語定型詩に対する執着と偏愛が顕著であり、彼の世代的趣味の限界と文芸の美的概念の偏狭さを指摘せざるをえない。また彼が春月の「泰西名詩名訳集」に「羊頭狗肉」の気配いを感知したとすれば、彼が東洋詩の1篇も収録しないで、「世界名詩選」と誇称するとき、何と言えよいのであろうか。春月が「泰西」という用語の中にオリエントを含めたのと対照的に、「世界」を欧米だけで考量すればよいのであろうか。彼は春月のアンソロジーに倣って、国別に、ただし、一味かえてアルファベット順に、しかも、わざわざ古代ローマを独立させて配列する。彼はアメリカ篇を4名の詩人による10篇の詩を5名の訳詩で、ベルギー篇を8名の詩人による12篇の詩を6名の訳者で、イギリス篇を34名の詩人による53篇の詩を18名の訳者で、フランス篇を39名の詩人による59篇を12名の訳者で、ドイツ篇を37名の詩人による45篇を11名の訳者で、ギリシャ篇を4人の詩人を5種の読人不知の詩の12篇を2人の訳者で、イタリア篇を3名の詩人による5篇を3名の訳者で、プロヴァンス篇を単独の詩人による2篇を1名の訳者で、ローマ篇を2人の詩人と1種の読人不知の詩の4篇を1名の訳者で、最後のロシア篇を2名の詩人による2篇を2人の訳者で構成している。彼の「世界名詩選」では、春月のアンソロジーに収録されていたハンガリー、スペイン、北欧3国、ユダヤ、インド、ペルシャの詩篇には興味を示さない。そして収録された詩の総数は204篇にすぎない。

あらためて、春月の詩篇選抜の原則を吟味するならば、「名詩」と「名訳」が

合一した理想的な作品のみを精選したのではない。平凡な訳稿に終わっているもので、「名詩」として名高いもの、さらには無名に近い詩人の作であっても、わが国の詩魂で研磨され「名訳」に数え入れられるものを、ことごとく詩集へ収録するだけの度量を持った。矢野峰人の眼からは「悪詩拙訳」にうつるこの総合評価の原則は、形をかえて「日本近代名詩集」でも有効であった。前篇が45名の詩人による124篇からなり、後篇が48名の詩人による213篇によって構成された詞華集でも、作品の特価ばかりではなく、作品の量や、はたまた世評および雑誌発刊や文学結社の世話といった詩壇における世俗的功績までも考慮せざるをえなかった。しかし、春月の最終的な基準は「個性の顕著と誠実の有無」であった。⁽¹¹²⁾そして技巧にはしまったもの、垂流のもの、虚名のみものは遠ざけて、採っていない。またスペシャリストと称する詩の工人は軽んじ、通常、抒情詩人と目されない作家や評論家の筆のすさびであっても、きらびやかな言語を弄する詩壇の大家の作よりも価値を認めることは少なくなかった。こうした姿勢は矢野峰人の選別基準に決して合致することはない。たとえ春月に採用された西詩のうちの37篇が、そのまま矢野峰人編の「名詩選」収録されていたとしても、別の基準をくぐりぬけたものなのである。矢野峰人編の詞華集が、いわば全体の形姿的調和よりも、純粹の鋭角と極限の純度をもつガラス器の切り子面の透明度と分光力を追求し、冷やかな水で精神のかわきをいやすことをめざすとすれば、春月編の詞華集は、いわばよき趣味の土塊で、厚くまろやかな象形で焼きあげられて、人手になじみ、そして魂の掌の中で満ち足りるまで温められ、甘露と芳香で心のかわきをいやしてくれる陶器に似る。春月の選んだ詩篇の親しみ易さと温かみは、その音楽性にある。つまり、彼の選別基準には視覚的效果よりも、口誦にたえうるかどうかということが重要な条件となっている。

矢野峰人著「去年の雪」を読んだ際、仏蘭西文学者窪田般弥は、最近は殆んど詩集も刊行されず、新しい世代の人達が名前も忘れ去ろうとしている春月が、かつて大正年間是最も読まれた詩人のひとりであることを思い出し、詩集、訳詩集、長篇小説など20冊以上も世におくった業績を回顧している。そして彼は、薄倅の詩人が、詩人として立つことを夢見た17、8歳の頃より、流転の間でも、愛誦するに好ましい詩篇はノートに書きとる習慣があったこと、そして朗吟の習慣があったことに感激している。「近頃は筆写とか暗誦といったことが不当に無視されているが、詩文に接する方法でこれに勝るものはない。詩の雑誌などを読むと、難解な哲学用語や晦渋な表現のみが目立つ文章や、一知半解の翻訳文にしばしば出くわすが、そうしたものは所詮詩とは何の関係もないものであろう。凡百の理

窟をこねまわすより、詩は誦んじるほどに読めばよろしい。真のポエジイはそうしたところから生まれる。春月は不遇な人間であったけれども、『数十冊のノート』や一卷の訳詩集ができるほど好きな詩を筆写したということを考えれば、彼は誰よりも詩を愛し、楽しむことができた幸福な詩人でなかったか。⁽¹¹³⁾」。この早稲田大学教授は、現代の詩人や一般読者が失ってしまったものを再発見し、その喜びを素直に驚嘆の声へ移している。彼は詩を本当に愛することはどんなことか、真の詩人はどんなものかを明確に認識したのである。

ここで、具体的状況ではどうだったのか、春月自身の描写でみてみよう。明治43年夏、動坂に下宿していた彼は帝国図書館に日参し、館外へ借り出して閲読した。明治5年4月に文部省博物局によって、湯島の旧大学講堂に「書籍局」が設立されて以来、紆余曲折を経て、また永井荷風の父親久一郎たちの尽力もあり、明治39年3月に上野の音楽学校敷地内で帝国図書館の開館式が行われなのであるが、その数年後に、春月は利用しはじめたのである。彼にとって、この図書館は、詩人となるための大学となった。そして下宿へ持ちかえった本も音読しないと気がすまなかった。

「あの夏の夕方であった。私は窓をあけて、外の光で、熱心に『浮草』を読んでゐた、例によって声をあげて。勿論、小さな声で。そのうちだんだん興に乗って、もう周囲を忘れて、すっかり書物の世界に没頭してゐたが、丁度ルウヂンがナタアリヤにやった手紙を読んで、それからナタアリヤがその手紙を焼き棄てて、いきなりプウシキンの詩集を開いて、その初めに目に触れた句によって占ひをするところまで来た。

こひせし人のあはれさは
いつまで草のいつまでも
かへらぬむかしかこたれて
浪たちさわぐころには
はなも紅葉もうつらめや
ただひとすちにくやくて
おつる泪は干さじとぞ

といふ句を読んでゐた時、不意に窓の外でくすくす笑ふ声が耳に入った。ふつと何気なしにその方を見ると、隣の家の妹娘が井戸端に水汲みに出て来てゐたが、水桶をそこへおろしたまま梅の樹の下に佇んで私の方を見ながらいかにもをかくして堪らないやうに笑つてゐるのであつた……娘は私の眼に出会うと、どぎまぎして急いで釣瓶をたぐり始めた。私は私ですっかりあかくなつて、

途方に暮れて、急いで障子を閉めてしまった。あとで姉娘が出て来て妹を叱つてゐる声をした。⁽¹¹⁴⁾」

勿論、ここで挙げられた二葉亭四迷訳のプウシキン詩は、10年後の「泰西名詩名訳集」へ採録されている。そして春月の無二の悦樂は、晩年になっても、心の友と閑夜に蕭々たる雨声でも聴きながら、ノヴァリスを口誦し、ハイネを論じ、ゲーテを語ることであった。事実、ハイデッガー研究者で「渾沌の児」（昭7.4、自家発行）の詩人でもある松尾啓吉の品川の自宅で、一夜、酒をくみかわした翌朝、春月は蒲団にねそべったまま、自作の詩ばかりでなく、自ら訳した西詩を、よどみなく、またうむことなく数時間もえんえんと暗誦したという。その記憶力の良さもさることながら、自ら産み出した作品への愛着を目のあたりにして敬服したという。それは、いわば魂の祭りと言える。

また彼のノートは、就中、彼が「いかばかり熱心な詩の使徒であったかを最も雄弁に語る記載である⁽¹¹⁵⁾」。そして、まだ語学力が未熟であった時期には、感動した訳詩の詩句をノートに書き入れ、折にふれ、それを開き見、学ぶことが彼の勉強法であり、虎の巻であった。それだけに詩人養成の目的から離れた詞華集編纂へ流用されたとき、ノートから幾多の難点が生じざるをえなかった。だが、矢野峰人が、春月の「愛吟」集の短所をあらんかぎり列挙しようとしても、なおかつ長所が光ることから、「久しく埋もれて何人にも顧みられなかった珠玉の断片も彼の手によって発掘紹介されたので、史料的意味からも珍重され、相当長く世に行われた」ことを認めざるをえなかった。彼は詩歌集の「史料的」意義に限定しようとするけれども、春月の意図したものが史料集ではなく、「詩の使徒」を創りだすものであった以上は、時間を超えた生命をもち、現時点でも、詩情と詩思へ導く初源的力を失わず、詩魂育成の「精髓的」意義も保持しつづけている。今後も、多種の名詩名訳を収録するアンソロジーが、いくつもあらわれてくるであろうが、春月の純粹無垢の詩魂から編まれた「泰西名詩名訳集」は、かつて中学生の富士川英郎に、劇作家シェイクスピアと異質な抒情的世界を開陳し、いつ知らず仏蘭西象徴詩や独逸浪漫派等の詩世界へひき入れて、読後、ひきつづいて、わが国の訳詩集を耽読さすまでの魔力を持ちえたように⁽¹¹⁶⁾、未来の地平においても、新しい詩魂を呼びさましつづけることであろう。

完

1984. 5. 10

註

- (65) 秦豊吉「独逸の『新しき村』」(「女性」昭2. 1 所載) p. 188.
- (66) ibid.
- (67) 生田春月「サイレンの誘ひ——有島武郎氏の記念のために」(「智慧に輝く愛」大13. 3, 新詩壇社) p. 37.
- (68) ibid. p. 68.
- (69) ibid. p. 72.
- (70) ibid. p. 73.
- (71) 内村鑑三・畔上賢造共著「平民詩人」(大3. 4, 警醒社書店) p. 9.
- (72) ibid. p. 11.
- (73) ibid.
- (74) ibid. p. 7.
- (75) ibid. p. 29.
- (76) 「世界名詩集」第21巻(ポー・島田謹二訳/ホイットマン・長沼重隆訳, 昭44. 10, 平凡社) p. 145.
- (77) 「内村鑑三著作集」第17巻(昭29. 8, 教文館) p. 295.
- (78) ibid.
- (79) 「内村鑑三日記書簡全集」第6巻(昭39. 10, 教文館) p. 299.
- (80) ibid. p. 240.
- (81) カーライル著, 畔上賢造訳「クロムエル伝」p. 2.
- (82) 内村鑑三「同志の弁護」(「聖書之研究」昭3. 10)
- (83) 生田春月編「泰西名詩名訳集」p. 299.
- (84) 「聖書之研究」(大4. 3) p. 151.
- (85) 畔上賢造「テニソンの宗教詩」(「聖書之研究」明45. 1) p. 123.
- (86) 生田長江「宗教的な履歴書一通」(「宗教至上」所載, 昭7. 2, 新潮社) p. 97.
- (87) 「文章世界」(明40. 12, 博文館) p. 237.
- (88) 生田春月「秋本と竹友」(「文章」明41. 4, 内外版協会) p. 589.
- (89) ibid. p. 590-591.
- (90) ibid. p. 591-592.
- (91) A生「四月号散文批評」(「文庫」明41. 5) p. 71.
- (92) 生田春月「秋本と竹友」p. 591.
- (93) 生田花世・生田博孝編「生田春月全集」第1巻 p. 38.
- (94) ibid. 第10巻 p. 457.
- (95) 生田春月「泰西名詩名訳集」p. 270.
- (96) 柳沢健「現代の詩及詩人」(大9. 10, 尚文堂) p. 191.
- (97) 生田花世「太陽の道・詩人の道——読書のノートより」(「詩人時代」昭8. 5) p. 64.
- (98) 佐藤信重他編「海図」(昭5. 7, 交蘭社) p. 18-19.
- (99) 生田春月「秋本と竹友」p. 589.
- (100) 生田春月「私を笑った娘(『ツルゲエネフの鼻』改題)」(「生田春月全集」第7巻収録) p. 69.

- (101) *ibid.* p. 70.
- (102) 生田春月「泰西名詩名訳集」p. 299.
- (103) 木村毅「明治大正雑著濫読抄」(「新小説」大14. 6) p. 10.
- (104) 矢野峰人編「日本現代詩大系」第5巻(昭26. 2, 河出書房) p. 382.
- (105) シェークスピア・坪内逍遙訳「ハムレット」(明42. 12, 早稲田大学出版部・富山房) p. 186-187.
- (106) 矢野峰人「去年の雪」(昭30. 4, 大雅書店)
- (107) 木村毅「私の文学回顧録」(昭54. 9, 青蛙房) p. 383.
- (108) 矢野峰人編「日本現代詩大系」第5巻 p. 382.
- (109) 木村毅「私の文学回顧」p. 364.
- (110) 矢野峰人編「世界名詩選」(昭36. 3, 毎日新聞社) p. 2-3.
- (111) *ibid.* p. 3.
- (112) 生田春月編「日本近代名詩集」(大8. 3, 越山堂) p. 3.
- (113) 窪田般弥「生田春月のこと」(「中央公論」昭50. 10) p. 304.
- (114) 生田春月「私を笑った娘」(「生田春月全集」第7巻収録) p. 70-71.
- (115) 生田春月編「泰西名詩名訳集」p. 2.
- (116) 参照 富士川英郎「生田春月編『泰西名詩名訳集』」p. 17.